

鹿角市文化財調査報告書 34

花 輪 館 跡

試 掘 調 査 報 告 書 (2)

1988-3

秋田県鹿角市教育委員会

財 政 課

序

花輪館跡の一部は、市民の憩いの場として活用されてきましたが、公園部分が狭く、施設も不十分であったため、昭和58年より公園拡張・整備事業が継続されてきました。

この度、第Ⅱ期以降の公園整備計画策定の基礎資料収集のため、試掘調査を実施いたしました。その結果、中～近世の遺構が多数検出され、鹿角の中～近世史を解明するための貴重な資料を得ることができました。

本報告書は、この結果をまとめたものでありますが、今後の埋蔵文化財の保護と研究にいささかでも役立てば幸いに存じます。

最後に調査から報告書作成まで、種々御指導・御協力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月

鹿角市教育委員会

教育長 柳 沢 源 一

例 言

1. 本報告書は、昭和62年度に実施した花輪館跡第2次試掘調査の報告書である。
2. 本報告書の執筆は、調査員、補助員が分担し、文責は各々の文末に明記した。
3. 資料の鑑定並びに同定は下記のとおり依頼した。

火山灰の蛍光X線分析	奈良教育大学教授	三辻 利一
陶磁器類鑑定	金沢大学助教授	佐々木達夫
石器類石質鑑定	十和田高等学校教諭	鎌田 健一
4. 土層・陶磁器などの色調の記載には「新版 標準土色帖」（日本色彩研究所）を使用した。
5. 本報告書に収載した地形図は、建設省国土地理院発行の「花輪」（1/25,000）を使用した。
6. 遺物の実測、採拓、トレース等の整理作業は、調査員・補助員が行なった。
7. 本報告書に収載した図版のスケールについては各々に示した。なお、写真図版は任意の縮尺とした。
8. 本報告書の文中において用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用しているものは簡略している場合もある。なお、図版等で、下記のような記号やスクリーン・トーンを使用した。

ST……竪穴遺構 SK……土壁 SD……溝、堀状遺構 Pit……ピット・柱穴

……地山

本文目次

序	
例言	
本文目次	
図版目次	
表目次	
PL目次	
第Ⅰ章 遺跡の環境	
1. 遺跡の位置と立地	1
2. 歴史的背景	1
3. 遺跡の現況	11
4. 遺跡の層序	15
第Ⅱ章 調査の概要	
1. 調査に至るまでの経過	18
2. 調査要項	18
3. 調査の方法	19
4. 調査の経過	20
第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物	
1. A区の検出遺構と出土遺物	22
(1) 竪穴遺構	22
(2) 柱穴群	30
(3) 土壇	31
(4) 遺構外出土遺物	36
2. B区の検出遺構と出土遺物	39
(1) 柱穴群	39
(2) 土壇	39
(3) 溝	40
(4) 遺構外出土遺物	40
第Ⅳ章 調査のまとめ	44

図 版 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の蛇跡 …………… 2	第16図 第1～3、5号土壌、 12ライトレンチ実測図 …… 32
第2図 花輪館跡周辺地形図 …………… 4	第17図 A区遺構内出土陶磁器、鉄製品、 土器、石器実測図 …… 34
第3図 花輪館跡現況図 …………… 5	第18図 A区遺構内出土古銭 …………… 35
第4図 花輪館の図 …………… 10	第19図 A区遺構外出土陶磁器実測図 …… 37
第5図 花輪通要客層敷図 …………… 13	第20図 A区遺構外出土古銭、銅製品、 鉄製品、土器実測図 …… 38
第6図 A、B区基本層序図 …………… 16	第21図 B区遺構・グリッド配置図 …… 39
第7図 C区基本層序図 …………… 17	第22図 第1号土壌、3ライトレンチ 実測図 …… 40
第8図 A区遺構・グリッド配置図 …… 21	第23図 第1号溝、Cライトレンチ 実測図 …… 41
第9図 第1号竪穴遺構実測図 …… 22	第24図 B区遺構外出土陶磁器実測図 …… 42
第10図 第2号竪穴遺構実測図 …… 23	第25図 B区遺構外出土古銭、鉄製品、 銅製品実測図 …… 43
第11図 第3～5号竪穴遺構実測図 …… 24	第26図 C区グリッド配置図 …… 43
第12図 第6・7号竪穴遺構、 6ライトレンチ実測図 …… 27	
第13図 第8～10号竪穴遺構実測図 …… 28	
第14図 第9号竪穴遺構、 12ライトレンチ実測図 …… 29	
第15図 Iライトレンチ実測図 …… 31	

表 目 次

第1表 周辺の蛇跡・一覧表 …………… 3	第4表 第7号竪穴遺構ビット一覧表 …… 26
第2表 第3～5号竪穴遺構 ビット一覧表 …… 25	第5表 12ライトレンチビット一覧表 …… 33
第3表 第6号竪穴遺構ビット一覧表 …… 26	第6表 遺構内出土古銭一覧表 …… 35
	第7表 Cライトレンチビット一覧表 …… 41

P L 目 次

P L 1 花輪館跡現況 …………… 47	P L 7 B区全景 …………… 53
P L 2 A区全景、第1～5号竪穴遺構 …… 48	P L 8 B区第1号土壌、第1号溝、 3ライトレンチ …… 54
P L 3 A区第2～7号竪穴遺構 …… 49	P L 9 C区全景 …………… 55
P L 4 A区第7号竪穴遺構及び遺物出土 状況、12ライトレンチ …… 50	P L 10 陶磁器(1) …………… 56
P L 5 A区第1、5号土壌、 Iライトレンチ …… 51	P L 11 陶磁器(2) …………… 57
P L 6 A区第8～10号竪穴遺構、第1、2 号土壌及び周辺の柱穴状ビット …… 52	P L 12 古銭、銅製品、鉄製品(1) …… 58
	P L 13 鉄製品(2)、土器、石器 …… 59

第I章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地

鹿角市は奥羽山脈の懷に形成された細長い盆地にある。盆地を北流する米代川両岸には、奥羽山脈の山裾から延びた段丘地形がみられる。この段丘は米代川支流の浸食作用によって発達した舌状台地となり、数多くの遺跡をのせている。花輪館もその一つで、東岸の段丘から北西方向に突出した舌状台地の先端に位置し、掘合坂や空堀等によって区切られた7つの郭から成る平山城である。本館跡はJR花輪線陸中花輪駅より目前に望むことができ、その距離は北東方向に約1kmである。

調査区は3カ所に渡っている。A区は昭和58年度試掘調査を実施した北館の南側の一角で、以前は宅地及び畑地として利用されていた。B、C区はゆるぎ館の一角をなすもので、南西側の郭をB区、北西側の郭をC区とした。

本館周辺には多数の中世の館跡が所在し、福土川を隔て北方に黒土館、北西方向に花輪古館、孫右エ門館が位置する。(佐藤 樹)

2. 歴史的背景

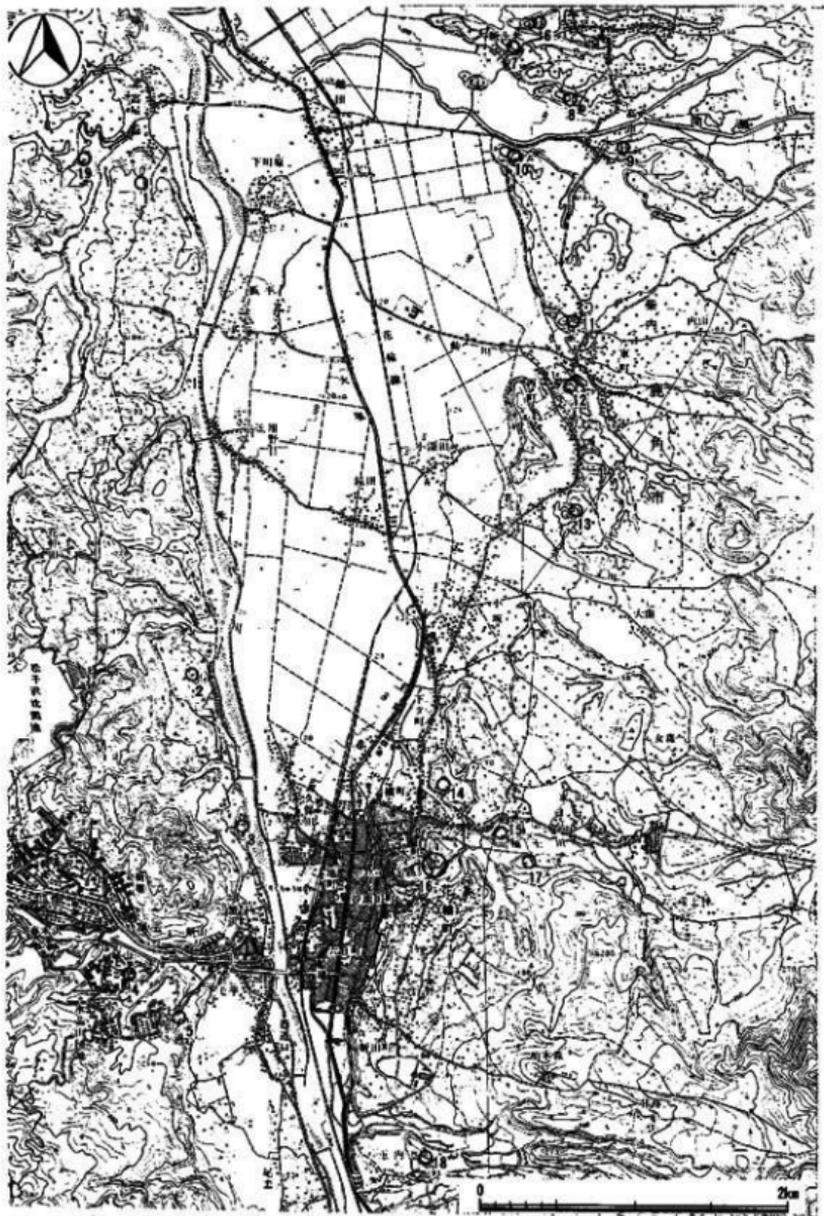
花輪館は、花輪市街地の東側一帯を占める上野馬場台地の、北側突端部に位置している。その標高は170～200メートル、市街地との比高およそ40メートルを測る。

館の周辺、即ち台地の西側急崖下には、花輪市街地と米代川に沿う低地が広がり、北側は同じく福土川の谷、南側は黒沢川の谷によって限られている。東側には山地の裾野が迫っているが、それも花輪館の一郭樋口（といのくち）館から字荒屋敷、字中ノ崎にわたる台地北東部を、福土川にそそぐ小流沢田川によって浸蝕された谷で区切られている。

したがって花輪館は、北へ舌状に突きでた台地の先端部を、縦横の空堀や堀合道によって区画された連続郭によって構成された、規模の大きな館跡である。

館のおもな郭に、御館（本館ともいう）、南館、北館、ゆるぎ館、樋口館があり、近年迄条子館やゆるぎ館のうち東の郭なども残っていたが、戦後の不規則な宅地造成によって消失してしまった。本年度調査対象地区になったのは、公園整備予定地の北館南部畑地とゆるぎ館（中の郭と北の郭残存部分）である。

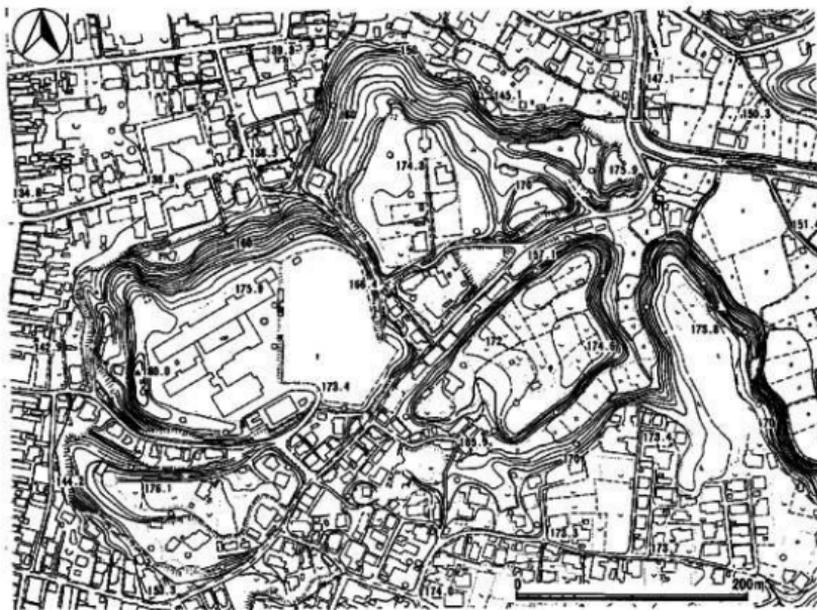
この花輪館の造営期については、今のところ明らかな結論を得ていない。中世から花輪地方を支配していた花輪氏の居館とする説と、天正18年（1590）以来の花輪城主大光寺正親の構築になるものとする説の両様に分かれている。しかし大光寺正親が花輪城に入る以前の、永禄・天正期（1558～）における鹿角地方の情勢と花輪氏の果たした役割からみると、やはり花輪館は花輪氏の経営に始まるもので、のち更に大光寺氏がその整備と強化に当たった、と考えるのが



第1図 遺跡の位置と周辺の館跡

第1表 周辺の館跡一覧表

No	館名	別称	所在地	土地利用	保存状況	城主(氏)	備	考
1	高屋館		鹿角市花輪字茶臼館	畑・原野	やや良	高屋筑前(秋元)	昭和58年館跡航空写真測量調査 「鹿角の館3」鹿角市教委1984年2月	
2	高瀬館	前館・熱館 涌館	鹿角市花輪字塚 忍沢、字涌館	山林・畑	やや良	高瀬土佐(秋元)	昭和58年館跡航空写真測量調査 「鹿角の館3」鹿角市教委1984年2月 昭和61年秋田県教委発掘調査 「高瀬館跡」1987年3月	
3	かいぬま館		鹿角市尾去沢字 土沢	畑・宅地	やや良			
4	茶臼館		鹿角市尾去沢字 新堤	原野・宅地	不良		昭和59年館跡航空写真測量調査 「鹿角の館4」鹿角市教委1985年2月	
5	上山館		鹿角市尾去沢字 西道口、字上山	宅地・山林 ・原野	不良		昭和59年館跡航空写真測量調査 「鹿角の館4」鹿角市教委1985年2月	
6	小平館	下館	鹿角市花輪字下 館	畑・宅地	やや良	小平彦次郎(家良)	昭和60年館跡航空写真測量調査 「鹿角の館5」鹿角市教委1986年3月	
7	新斗米館		鹿角市花輪字新 斗米、字大坊沢	畑・山林	不良	新斗米左近(家良)	昭和54年・55年鹿角市教委発掘調査 「新斗米館跡第Ⅰ・Ⅱ次発掘調査報告書」 1980・1981年3月	
8	高市向館		鹿角市花輪字高 市向	畑・学校敷 地	不良		昭和56年鹿角市教委発掘調査 「高市向館跡発掘調査報告書」1982年3月	
9	高市館		鹿角市花輪字高 沢	畑・寺社境 内	やや良	高市玄蕃(成田)	昭和60年館跡航空写真測量調査 「鹿角の館5」鹿角市教委1986年3月	
10	万谷野館		鹿角市花輪字万 谷野	畑・原野	不良		昭和60年館跡航空写真測量調査 「鹿角の館5」鹿角市教委1986年3月	
11	地蔵野館	館こ 中柴内館	鹿角市花輪字地 蔵野	畑・原野	不良	中柴内八郎(安保)	昭和60年館跡航空写真測量調査 「鹿角の館5」鹿角市教委1986年3月	
12	柴内館	南館、北館 本館、下モ館	鹿角市花輪字西 町	畑・寺社境 内・宅地	不良	柴内弥太郎(安保)	昭和60年館跡航空写真測量調査 「鹿角の館5」鹿角市教委1986年3月	
13	乳牛館		鹿角市花輪字乳 牛平、字雲の神	東北麓貫自 動車道・寺 社境内	消滅	乳牛六郎(安保)	昭和56年秋田県教委発掘調査 「東北麓貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ」 1984年3月	
14	黒土館		鹿角市花輪字隈 場	畑・原野・ 宅地	不良	黒土丹後(秋元)	昭和60年館跡航空写真測量調査 「鹿角の館5」鹿角市教委1986年3月	
15	花輪古館		鹿角市花輪字古 館	畑・宅地	不良	初花輪次郎	昭和60年館跡航空写真測量調査 「鹿角の館5」鹿角市教委1986年3月	
16	花輪館		鹿角市花輪字中 花輪	山林・畑・宅 地 学校敷地・公園	不良		昭和58年鹿角市教委発掘調査 「花輪館跡試掘調査報告書」1984年3月	
17	孫右エ門館		鹿角市花輪字孫 右エ門館	原野・水田	不良			
18	玉内館		鹿角市八幡平字 玉内	山林・畑	不良	玉内大炊助(安保)	昭和56年館跡航空写真測量調査 「鹿角の館1」鹿角市教委1982年3月	
19	太田谷地館		鹿角市花輪字太 田谷地	山林・原野 ・畑	不良		昭和62年秋田県教委発掘調査	



第2図 花輪館跡周辺地形図

妥当のように思われる。

花輪氏は、鹿角四姓、鹿角四頭などよばれた安保・成田・奈良・秋元四氏のうち安保氏を本姓とし、『鹿角由来記』（寛文年間）に次のように伝えている。

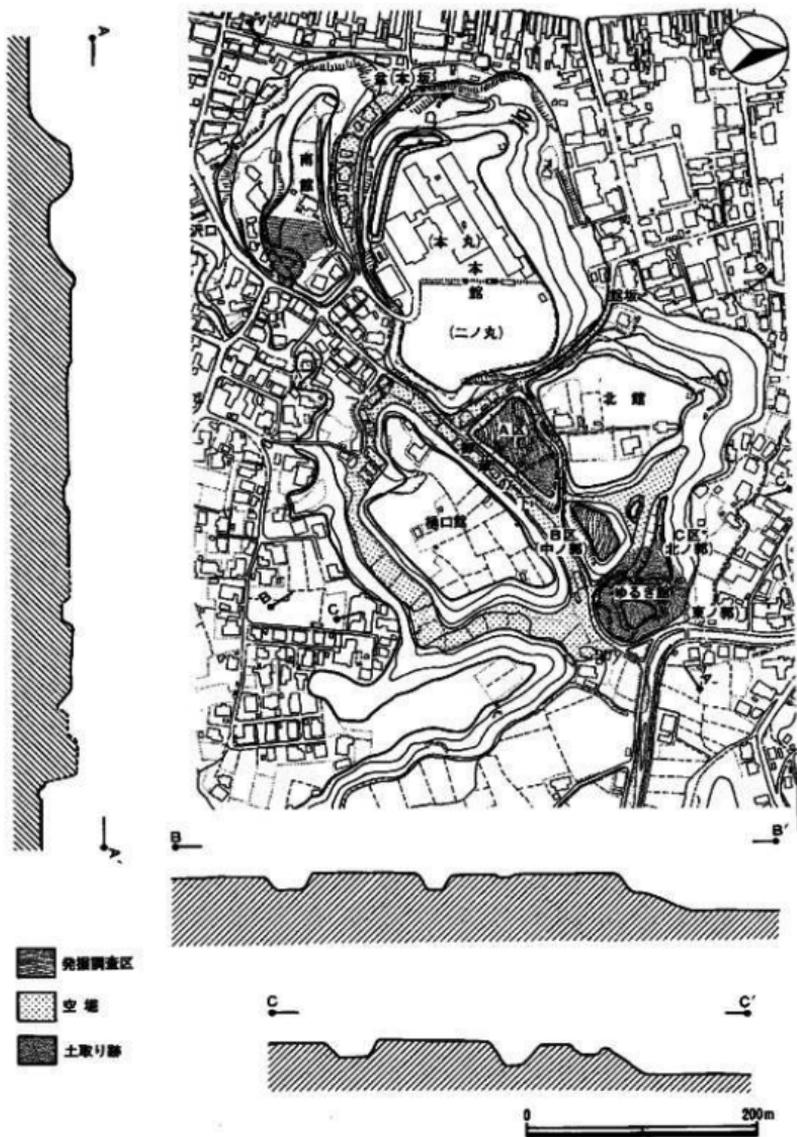
○鹿角郡四天侍之事

都より阿保氏老人鹿角へ御下り御子三人是有 一男は大里領知大里上総先祖 二男は花輪村領知花輪次郎先祖 三男は柴内領知にて柴内弥次郎先祖也 其後秋元 成田 奈良氏御下り被成 奈良氏は大湯村領知也 時の人阿保 秋元 奈良 成田四天士と申也

○鹿角郡四十二館にて侍四十二人居候事

一、花輪村 花輪次郎領知 本名阿保 大里上総先祖と兄弟也 花輪臥牛本館へ移 其子孫村替にて九戸の円子へ知行三百石にて被遣 後に天正八年大光寺左衛門佐正親を信直公より知行三千石にて被遣也 村数花輪 尾去 石鳥屋 三ヶ田 夏井右五ヶ村領知 花輪村は大館也

以上の記述にみられるように、安保（阿保）氏は古代に都からこの地へ下向したと伝説的に語られてきた。そもそも安保氏は武蔵国賀美郡安保郷を本貫地とする関東御家人で、鎌倉期に



第3図 花輪館跡現況図

鹿角郡の内にも所領を得ている。その関係文書としては、鹿角郡名の初見史料でもある信濃安保文書文保二年（1318）十二月二十四日「関東下知状」（安保行員に鹿角郡内柴内村の領知を命じている）、京都八坂神社文書正中二年（1325）十二月六日「安保行員謙伏案」、同暦応二年（1339）九月二十日「成田基員謙伏案」等が知られている。有力御家人安保氏の所領は全国各地に散在しているので、鹿角郡へも関東の惣領家から一族のうちの然るべき者が、地頭代として送りこまれてきたのであろう。

伝承によると、初め花輪氏の居館となったのは、花輪館の東方富士川を距て200メートル前後にある花輪古館であったとされている。安保氏ははじめ鹿角四氏の後裔を称する人たちのそれぞれの勢力範囲が明らかとなるのは、『津軽一統志』に「天文十五年（1546）遣文」として所載の「郡中名字」からである。そこに「鹿角三百町八四人ノ國人也。所謂奈良・成田・阿部（保）、秋元四人ナリ、（略）阿部八大里・柴内・鼻和三ヶ所ニ分ル」と記されている。戦国期においても、鹿角安保氏はいよいよ結束を固め、『鹿角由来記』には、鹿角四十二館のうち三ヶ田館、夏井館、石鳥谷館、松館、尾去館、大里館、玉内館、花輪館、柴内館、乳牛館、中柴内館、折ヶ内館にそれぞれ安保氏一統が拠っていたことを伝えている。なかでも特に大里氏、花輪氏、柴内氏は安保三人衆と称され、しばしば三戸南部氏に反抗した。

永禄の初め、花輪伯耆守親行らは秋田檢山の安東愛季と款を通じ、同八年（1565）に始まる安東勢の鹿角侵攻に当たり反南部氏の立場から長牛城を包圍攻撃した。同十一年、南部氏の大軍鹿角出兵によって安東勢が撤退し、親行らは一時郡外に退去したが、その後南部氏に晴政・信直父子の相剋が起こり、親行は南部晴政に仕えたと『奥南落穂集』に記されている。元秋田子爵家蔵の『湊合戦覚書』の一項に「愛季ノ時 南部領ノ内シワ（斯波） シツクシ（磐石）

カドノ（鹿角）花輪ハウキノ守 ナマナイ（毛馬内）殿 カシラ也 コレヲヲシタガエ札ニキタリ 仙北ハヨトカハ（淀川）ヲ切取」云々の記載がある。『岩手県史』にしたがえば、この覚書は安東愛季最後の口述書と推定される。愛季は天正十五年（1587）九月まで存命しているので、それ以前のものであろうけれども実年代は明らかでない。花輪ハウキノ守は伯耆守親行のことで、一時的には南部一門である毛馬内鞠負佐信次をも誘い、安東方と気脈を通じ、鎌倉以来の伝来の故地を守ろうと画策した有様が髣髴としてくる。

天正十年正月、南部晴政と世子晴継が相次いで死去し、田子城主南部信直が南部大守となる政変のなかで、花輪氏は再び離散を余儀なくされ九戸郡円子村へ移った。『奥南落穂集』花輪帯刀延親（親行の子）の譜に「延親 花輪帯刀 後号円子 従先祖数十代花輪居住之処 天正年中領知被滅却 一族離散 其後 大膳大夫信直公御代被召出 標部郡九戸之内 円子村ニ而二百石余被下 依後改円子」とあり、その後円子氏を唱えるようになった。天正十九年（1591）いわゆる九戸一揆の際、九戸落城後主将九戸政実をはじめ大里修里親基、大湯四郎左衛門昌次

などと共に一味の頭人として栗原郡三迫へ送られ処刑された八人のなかに、円子右馬允光種の名を見出すことができる。

以上述べた花輪氏の戦国期における活動は、花輪館の造営が誰の手で行われたかという問題と深くかかわっていると考えられる。即ち当初花輪氏の居館だったと伝えられる花輪古館は、福士川の小さな谷に面し、視界も狭く、攻・防ともに不向きな地形の中にある。かつまた、戦国期豪族の居館の立地としての歴史地理的な一般通念にも遠い。鹿角在地武士の一方の旗頭として屢々実戦のなかに名を挙げている花輪氏の拠点としては、やはり眼下に米代川を望み盆地一円を視野に取めることのできる花輪館こそ相応しいものであろう。

天正十八年、花輪城主として大光寺左衛門佐正親が入った。その前年、南部勢を鹿角郡から比内へ導き大館城を攻略せしめた軍功によるものであった。従って前記『鹿角由来記』花輪村の項に「天正八年大光寺云々」とあるのは、天正十八年の誤りである。「参考諸家系図」大光寺系図正親の譜に「天正中鹿角郡花輪城代トナリテ之ニ居 利直公慶長六年十月同郡花輪村尾去村 石鳥谷村 三ヶ田村 谷内村 神田村 夏井村ニ三千八百石ヲ賜フ」とある。正親は勇将を以て聞え、天正十九年九戸争乱に際しては、九戸方の大湯鹿倉城を猛攻のち落城せしめた。慶長六年(1601)十月には、岩崎合戦に出陣し右先手一番隊侍大将として活躍した功により加増されている。

大光寺氏は、花輪へ移ってまもない慶長元年に、南館の南麓現在の長年寺寺域に菩提所長福寺を建立した。この位置を選んだのは、籠城戦における防衛陣を想定したものであろう。また同じく七年、本丸坤(ひつじさる・南西)の位置に八幡宮を造営した。天保十二年(1841)花輪南部家『御用留帳』に、別当幡坂直輝の書上として「花輪御館御本丸 一、八幡宮 慶長七年大光寺左衛門佐正親為城主御造営 其後慶長九年 利直公より御絵像左衛門佐江被下置 裏ニ慶長九年甲辰八月十五日信心之大禮那ト御記 夫より三月三日御祭礼被仰付御座候」と記されている。

花輪城代大光寺正親は、はじめ郡代とも称せられたという(『郷村古実見聞記』)。当時、鹿角郡の一般庶政を委任されていたためであろうとされる。元和二年(1616)正親卒去のあと弟儀太夫正徳の相続となったが、その際二千五百石に減祿された。のち寛永八年(1631)正徳が死去し、跡を子儀太夫正邦が継いだ。その後宮内大夫正治、宮菊正景と続いたが、いずれも事蹟は不明である。正景は四歳で父を失い、相続における伯父正信との確執から家祿没収の上改めて尾去村三百石を与えられた。大光寺氏の花輪館退去は、おうむね寛永廿一年(1644)のこととされている。

もともと花輪館は郡政枢要の地を占め、かつ領境争論の絶えない秋田との国境に接する要衝であった。大光寺氏の退去後、花輪城代は二人制の時代に入ることとなり、『花輪御城伝記』

(天保三年)には「慶安三年御郡代 一、目時勤太夫 野田内匠 波岡勤解由左衛門 米田四郎兵衛 下田覚左衛門 太田鏡殿 山田太右衛門 桂七郎兵衛 儀我八郎兵衛 安田覚太夫 右人数御境奉行ニ而御郡代兼帯 万治元年迄九年ノ間相勤ト云」と、その名を列ねている。このうち野田内匠の就任については傍証を欠き、山田太右衛門は花輪代官との混同ではないかといわれる。これらの城代は、同心三十名を預けられての交替勤番であった。

明暦三年(1657)八月、毛馬内九左衛門長次が毛馬内城から花輪城へ移った。当時藩境争論が激化し、秋田藩に対する交渉儀礼の上からも重臣任命が必要であった。毛馬内氏の花輪在城は、三左衛門定次の延宝二年(1674)三月までの十七年間である。その治績はあまり知られないが、花輪神明社別当家「手鏡記録書」に「万治二己亥歳 本堂并拝殿奉修履候 願主毛馬内九左衛門様御寄遣被下候」とあることや、寛文七年(1667)「花輪御町酒屋定事」(佐羽内操氏文書)に大町五軒・新町二軒計七軒の酒屋が公許されている状況から、花輪の町並も漸く整えられたことが想像される。また九左衛門長次は家老として藩政に敏腕を振るい、万治三年夏の藩士四十二名の人員整理断行、山城守重直死去後の七戸単人(後の重信)擁立派として名高い。

寛文十三年、九左衛門長次は歿したが、嗣子三左衛門定次も病床にあることが多く、藩境争論がいよいよ重大局面を迎えた時期に重責を果し得ないことを憂慮した長次生前の願出により、毛馬内氏は延宝二年(1674)三月、花輪城を去り二戸郡へ知行替となった。この間の経緯を「秘記」は次のように述べている。「三月十四日毛馬内九左衛門存命之時分 預被申候花輪ノ城、三左衛門義病氣、弥次郎(三左衛門の子)幼少ニ付而、九左衛門願之通御免 今日弥次郎ニ申渡之」「四月十一日花輪御城引渡候ため 下田覚左衛門望月文平被遣 城相改之 伊折(後の中野吉兵衛康敬)家来ニ渡候由 御城道具并城内屋敷改書付 兩人今日上之」。

新たに花輪城に入った中野氏は、南部家の一門で八戸氏、北氏とともに世に御三家と称されていた。花輪館本丸に御仮屋を設け、家中六十余名は横町・袋丁を中心に居住、預り御同心三十名は組丁に住んだ。入部と同時に長福寺を堰向の現在地に移し、その跡に中野氏の香華院長年寺を建立した。「御境古実録」に「康敬公御幼名伊織ト申上候 此君始而花輪御城代并御境御預被仰蒙 此君文武之道ニ英達被遊武勇ニ長し給ふ故 御境御司被仰付ト申候候 尤花輪ニ而御知行千五百石被給 右御役御蒙被成候は延宝二年五月御蒙 同七月花輪江御入部此節大守行信公ヨリ御腰物御拜領 右御腰物ニ延宝二年七月四日入部ト御彫付有之候ト伝御座候」と記されている。

正徳元年(1711)、吉兵衛康敬は「志和彦部村、稱貫郡太田村千五百石 花輪御替地被仰付 依之花輪千五百石指上 御城代御免也」(『花輪御城伝記』)という事態を招いた。康敬は元禄八年(1695)から家老席に連なり、宝永五年(1708)幕府の普請手伝を命ぜられた際の江戸家老であったが、同七年九月藩家老御役御免となっている。

中野氏の産部替地から再び花輪支配に復する二十年間は、郡代の交替勤番の期間となり、『花輪御城伝記』（川村元家文書）は次のように伝えている。

一、川守田弥五兵衛 伊藤所左衛門 横浜金十郎 川島左衛門 中山平兵衛 中村武左衛門 織笠庄助 岩間左兵衛 矢幅八右衛門

正徳元年より右人数御郡代ト申而御本丸ニ罷居ト 又二ノ丸居候事有之 正徳元年より享保十五年迄廿年ノ間相勤ト云

其頃御境奉行 遠山（藤）伝左衛門 枋内与五左衛門 石井勝左衛門 小枝指伝兵衛 小野五兵衛 沢田助二郎 八木橋茂右衛門 築田平右衛門

右人数も御境奉行御郡代兼帯カ 又御境ノミカ不詳

享保十五年（1730）、中野吉兵衛光康は「御父君広康公御代花輪千五百石指上候処、尚又此度旧地ニ依而花輪之内千四百八十石余被下 花輪御館請取之為川村儀右衛門川村利左衛門罷越 御境奉行枋内与五左衛門とのより御館并御境御用筋請取相勤ト云 同五月十日花輪江御入部ニ而御出立也 御上下九十五人 同七月古人山見共ニ御手前御宗門附ニ被成様被仰付」（『前掲書』）とあるごとく、再び花輪支配を命ぜられ花輪館に入った。

筑後康定は、鹿角郡花輪村二百五十石、川部村三十石、岩手郡寄木村百五十石、二戸郡曇部村七十石、あわせて新田五百石を開き増禄を許されている。

明和二年（1765）吉兵衛康致の代、尾谷沢銅山が藩の御手山となるに及んで、中野氏の知行町であった花輪町は「御代官支配」を命ぜられ代官所へ引渡されることになった。即ち中野氏家中屋敷を除く外はすべて代官所支配となった状況を、『花輪町御代官所江引渡候書留帳写』によると「十月廿九日 沢口より関向通 御町通 不残見分 沢口屋敷 長年寺門前家三軒 大光寺屋敷相除相渡 恩徳寺の下々 長年寺門前相除外相渡ス 関向与兵衛屋敷御田地之内故相除 小上清水五郎助家右同断外相渡 袋丁工藤久右衛門屋敷より弥之助屋敷町屋敷故相渡」云々と記録されている。康致は、明和七年二月家老に挙げられたが、翌八年六月二十五歳で病死した。

筑後康房は、寛政二年（1790）家老席詰となり、同五年より三年間江戸在勤。当時連年の凶作に加え御用金等の過徴に反発する農民一揆が相次いだので、藩は幕府の聞えを憚り施政宜しきを得ずとして筑後らの職を免じた。その後文化五年（1808）再び席詰となり、同十三年役御免となるまでその職にあった。

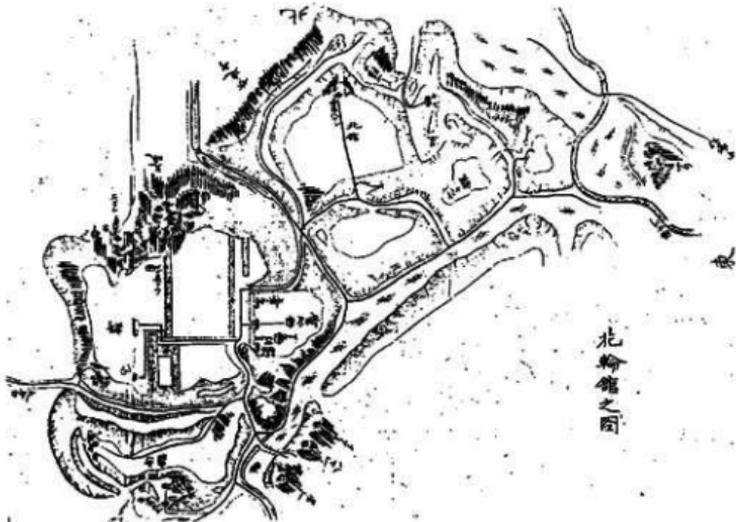
出雲康孝は、文化十三年加判役となり、のち筑後を名乗る。文政元年（1818）十月、中野氏は八戸・北・南・東各氏とともに南部姓を称することと無輪双鶏紋の使用を許され、以後南部筑後康孝となるが、同四年病を得て家老職を辞している。

吉兵衛濟徳（のちの濟愛）は、幕末の風雲のなかに身を置き戊辰の敗戦に直面した最後の花

輪館主であった。大里舟稿「花輪南部家略系図」は次のように略譜をまとめている。

濟愛 初メ康久 次ニ濟徳 南部吉兵衛

天保十二年正月罪アリ 身帯ノ内千石金禄トナリ二千石ハ地ヲ換ラレ 且南部土佐ノ次席トナリ 家来ノ者直臣ト縁組スルヲ禁セラシ 十一月鹿角境警衛ヲ免セラレ 十二月花輪館武倉武具并同心トモ代官ヘ引渡ス 十四年八月茨島大演習ノ時浮勢別手備トナリ騎士六名惣勢三百余名ナリ 九月定火消トナリ 嘉永元年二月近習頭トナリ 三月藩主利濟ノ一字ヲ賜ヒ濟徳ト称シ後濟愛ト改ム 十一月加判役兼近習頭トナル 同五年四月三家ニ命セラレテ公用人ヲ置ク 同六年十一月休職 七年正月海岸備頭トナリ 安政二年四月加判役再勤 五月身帯地所旧ノ如ク賜ハリ且座席及鹿角境警衛花輪館及ヒ同心預リ等旧ノ如シ 文久二年八月旧ノ如ク直臣ヘ諸費子縁組許サル 同十二月休職トナル 慶応四年四月花輪住居ヲ命セラレテ花輪館ニ居ル 戊辰役手勢ヲ以テ一方ノ守衛ヲ命セラレ藩ノ目付小枝指隆五郎コレニ監タリ 戦止ムノ後復タ盛岡ニ帰ル 長男康彊早ク死シ二男康直ヲ以テ嗣トナシ 明治十年六月十六日濟愛病死 寿六十三歳



第4図 花輪館の図(万延元年「両鹿角屋従日記」所載)

なお花輪館は、文化二年三月藩から幕府へ提出した「居城並抱城、要害屋敷之書上」によれば、領内要害屋敷五ヶ所（花輪、毛馬内、遠野、七戸、野辺地）の内の一つにかぞえられている。要害屋敷とは、他領に対峙する関城として、或いは領内統治上政治的にも経済的にも重要な意義を有する擬似的城館であるといわれる（『鹿角市史』第二巻上）。御館の内本丸には花輪南部氏御飯屋、武具蔵、二の丸に花輪通代官所、御蔵、文庫蔵、稽古所等が置かれていた。藩政期を通して、花輪館が施政上の主要拠点として重要視されていたことを示している。

第4図の「花輪館之図」は、万延元年（1860）八月藩主利剛の巡見に従って鹿角入りした中奥御小姓上山守古の「両鹿角屋従日記」に載るものである。安政三年（1856）三月花輪代官所の違によって認めしたのは、「三御館並ゆるぎ館迄」の絵図面であったので（『諸御用留帳』）、これはおそらくその写であろう。この以前より花輪館とは三御館（本館・北館・南館）とゆるぎ館の範囲とされ、古くからの樋口館・桑子館などの郭はすでに廃され、悉く畑地にされていたものと思われる。

3. 遺跡の現況

花輪館の現況は、概ね近世の構造と規模を残しているとはいえ、本館は明治三十七年以来小学校校地としての変遷の内に空堀・土手・土塁等を失い、北館には明治三十年盛岡桜山神社の分祀にともなう公園化が行なわれてきた。とくに戦後、一部の腰郭状段築や堀合道あるいは小郭を低平にしての住宅地造成が進められたため、かなり原形を消失するに至った。加えて昭和四十年代後半から五十年代の初めにかけ、北館南郭の一部が掘削され、ゆるぎ館東端の郭が災害防止の名目で一挙に崩され跡かたなく消滅したことにより、典型的な平山城としての威容は著しく損なわれてしまった。その後も急傾斜地崩壊防止工事が毎年のように行われ、郭側面の急崖が人為的に削られ、堀底道は拡幅されて、次第に旧状破壊の度が著しくなってきた。

花輪館は、連続する6以上の郭から成り、おそらく初め花輪氏の造営によるものと考えられる。さらに天正末年から慶長へかけて大光寺氏の手により、堅固な城館に強化されたのであろう。藩政期のこの館は、おもに三御館（本館、北館、南館）とゆるぎ館の各郭をもって構成されていた。これらの郭は、標高ほぼ175メートル、比高30—40メートルで自然の段丘地形を巧みに利用したものである。それぞれの郭の、低地に落ちる斜面は火山灰層特有の切り立った急崖で聳え立ち、各郭間は空堀を穿って隔てられている。本館の周縁には、今も土塁の遺構を残している。

本館と南館の間の堀合坂は大手口に通じ、盆（本）坂または中の坂とよぶ。本館と北館の間の堀合坂を搦手口とし、館坂または下（しも）の坂という。南館と花輪南部氏の香華院長年寺の間の坂を沢口といい、上（かみ）の坂とよんでいる。本館、北館、南館はその外側斜面に1

～2段の幅5～10メートルの腰郭をそなえる。北館の東側、ゆるぎ館の中ノ郭、北ノ郭に囲まれた凹地はやや複雑な地形を呈し、鉄炮槽古の星場となっていた。このゆるぎ館東端（東ノ郭跡）から、樋口館を隔てる堀底道を南西にたどると、約400メートルで盆坂の頂部、大手門下夕に達する。

以下、この度の調査にかかわる北館とゆるぎ館に限って述べる。

(1) 北館

本丸・二ノ丸のこの本館の北東側に接続する郭なので、北館とよばれる。

この郭の上部平坦面は、南北を長軸とし130メートル、東西100メートルで、面積約12,000平方メートル、北端がやや突出している。旧藩時代、若宮八幡社が鎮座し家中屋敷もあったが、明治三十年盛岡桜山神社の分社が遷され、次いで忠魂碑、慰霊塔、郷土先覚者の顕彰碑などが建てられるに及んで、次第に史跡公園の雰囲気をつくってきた。

北館と本館との間に、掘手口の館坂とよばれる狭く急な堀合坂が通じ、その坂下と北館との比高36メートル、この館坂を上りつめ、左折して北館に入る。また館坂の中腹近く、旧坂ノ脇稽古場跡の上方からも、北館へ上る小径が通じている。この小径の中ほどの南側を、上面からほぼ8メートル下に幅7メートル前後の腰郭がめぐり、同じく小径の北側すなわち北館西側にそい、上面から10メートル下に幅13メートル、長さ50メートルの広い腰郭部が付設している。この腰郭部真下の山裾に、明治初年廃寺となった祈祷寺真言宗妙（明）蓮寺跡がある。西側腰郭の北端部には、小丘状の防塁と壕跡が残っており、ここから北側斜面の空堀の堀底をたどると、北館東側の鉄炮槽古の星場跡とゆるぎ館に通じる。なお北館上面は、昭和58年トレンチによる試掘調査を実施している。

○北館の南郭について

北館の南縁に接し、面積約3,500平方メートルの小郭が付属している。北館と同一の台上にのこの小郭は、かつてどのような呼び方をされたか明らかでないが、おそらく北館の一部として扱われ、桜山神社のある広い部分を北郭とすれば、いわば南郭とよんでいいように思われる。この度公園造成地の拡大にともない、発掘調査が行われることとなった。

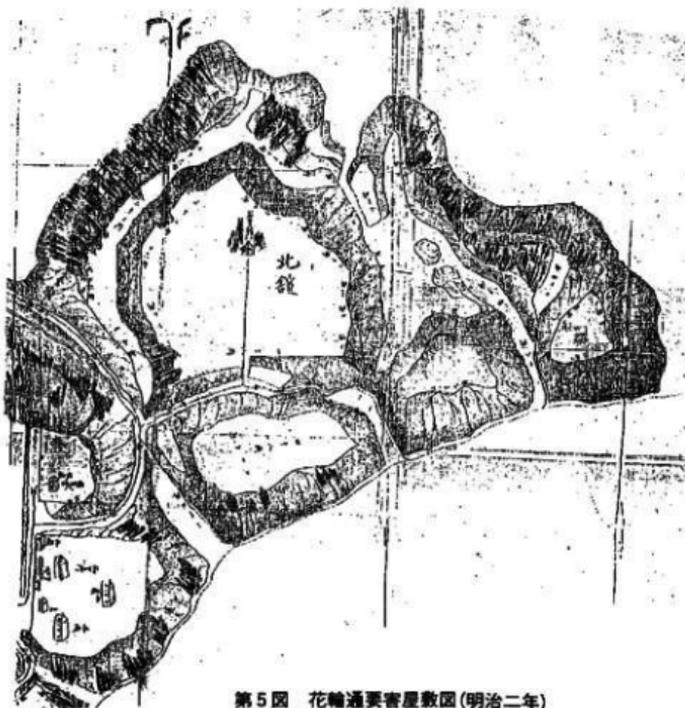
この郭の上面は、北館北郭上面より低く、その段差2メートルほどである。北郭と南郭を画する段差の部分載るように、館坂から分岐した狭い堀合道が通じ、両郭共通の出入口となる。その延長はやや南寄りゆるぎ館中ノ郭との間の堀合坂となって、樋口館下夕の堀底道へ下っている。花輪館の他の郭にも共通することとして、実は同じ郭の上面をある段差によって上位面と下位面に分ける特色をもっている。本館における本丸と二ノ丸を画する段差、南館の東寄りに残る段差の痕跡、ゆるぎ館の東ノ郭（消滅）と北の郭との段差、ここには整然とした空堀が入っていた。同じくゆるぎ館中ノ郭の上面にも、明瞭な段差が認められている。従って北館

も上記の如き段差によって北郭と南郭の上下二面に分けられていたと考えられる。

明治二年川村俊平書上の「花輪通要害屋敷図」（第5図）には、南北二十八間・東西四十八間とこの南郭の間数を書きこまれている。近年昭和五十年頃に至り、東寄り部分が大きく削りとられてしまったので、現況は東西約60メートル・南北約40メートルのややいびつな長方形を残している。その北縁は北館北郭との間の堀合道に接し、西側は本館との間の堀合道、南側は樋口館との間の堀合道へそれぞれ急斜面となって落ちている。上面の標高172メートル、樋口館側堀底道との比高約15メートルを測る。藩政期から殆ど畑地になっていたと思われ、最近までその畑地の中に建てられていた農家も他へ移転した。

(2) ゆるぎ館

北館の東側に接する面積約9,000平方メートルにおよぶ区域で、三つの小郭をあわせて総称したものようである。安政三年川村俊平作成絵図面には、東端に位置してその裾が福土川岸へ落ちる郭（仮に東ノ郭とする）にユルキ館と名を入れ、万延元年「両鹿角愚従日記」記載図



第5図 花輪通要害屋敷図(明治二年)

面では、北館の南部と空堀を隔てて接する郭（仮に中ノ郭とする）にユルキ館とかき入れている。なお北縁部、沢小路側に東西に細長く延びている長根状の小郭（仮に北ノ郭とする）があるので、これらの3小郭が、それぞれの間を空堀で隔てながら設けられていたことになる。

3郭のうち東ノ郭はすでに消滅し、この度公園造成計画による調査対象区となったのは中ノ郭と北ノ郭（残存部分）である。

1) 中ノ郭

北館と空堀をへだてて相接する郭で、上位面は標高174メートル、およそ東西50メートル、南北30メートルと狭い。上面の中ほどに、ほぼ南北方向に設けられた段差の跡が残り、東側がやや低い。郭の西側、北館との間に空堀が設けられ、概ね上幅10メートル、下幅6メートル、深さ8メートル、長さ25メートルを測る。

この郭北側に、北館上面より10メートルほど低く、不規則な高低をもつ窪地が広がり、丁度三角形に北館、ゆるぎ館中ノ郭、同北ノ郭に三方を囲まれ、かつて鉄炮星場となっていた場所である。星打とは、標的をうつつ鉄炮の射撃訓練のことをいう。安政三年絵図面をみると、この星場には見場小屋が建てられていた。

中ノ郭の北東側は、北ノ郭、東ノ郭との間に深い空堀が載られている。空堀の下幅約10メートル、北ノ郭上面からの深さ8～12メートル。この堀合を下ると、樋口館との間の堀底道に通じていた。

2) 北ノ郭

北ノ郭は、この区域の北縁を画するように東西に細長く横たわっている。標高165～170メートル、西によるほど上位面の幅が狭まり、東側東ノ郭に近くなるほど幅が広がり高さをも増す。東西を長軸とし85メートル、東ノ郭接続部で南北35メートル、東から西へゆるく傾斜しているが、東ノ郭の消滅にともないこの北ノ郭の東側部分も大きく掘り崩され、殆どその半分を失った。かつて東ノ郭との接続部に空堀が設けられ、その下幅5メートル、深さは東ノ郭上面から8メートル、北ノ郭側2メートル前後であった。空堀の北端は急崖となって下へ落ちこみ、同じく南端からの急崖は中ノ郭との間の堀合に落ちこんでいた。

西端近く中ノ郭との間に、三角形の窪地が広がり、前述の鉄炮星場である。この星場に添うごとく窪地内に数ヶ所の土盛りが残っている。この窪地には、北館をめぐる堀底道が通じ、沢小路から北斜面を上り下りする小径も通じている。

3) 東ノ郭

昭和五十五・六年、火山灰層急崖の一部崩潰をみたことから、災害防止のため全郭を掘り崩してしまい、いま全く旧態をとどめていない。ゆるぎ館の語源として、この館の真下に福士川の水勢がぶつかり館全体が揺いだという伝承があることからすれば、本来この郭がゆるぎ館で

あったと思われる。郭の上部平坦面は標高176メートル、比高およそ25メートル、面積は南北50メートル、東西30メートルを測った。郭の西側を除く三方は、火山灰層特有の切り立った急崖をなし、東側間近く福土川が迫り方向をかえている。郭西側は、その中位面で空堀を隔て北ノ郭に連なっていた。

(安村二郎)

4. 遺跡の層序

調査対象区は北館、ゆるぎ館（中ノ郭、北ノ郭）の3ヵ所におよび、それぞれの基本層序は若干の相異がある。

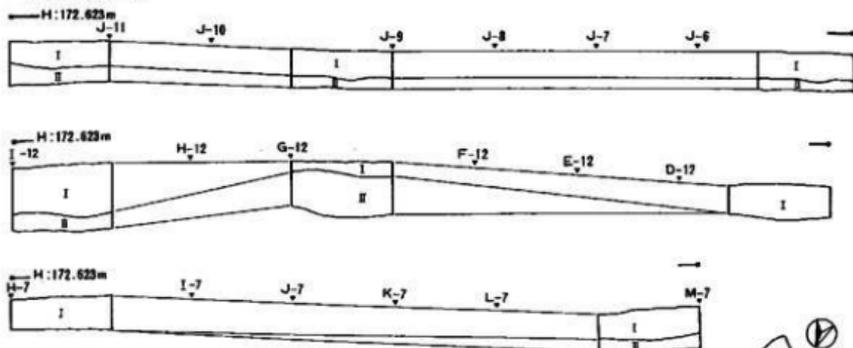
A区とした北館の南縁に位置する小郭の現況は、宅地および畑地として利用されており、ほぼ平坦である。北半部ではその攪乱が地山にまで及んでいる。層序は2層に区分でき、I層は黒褐色土の耕作土である。II層は黒色土で南半部において認められた。

B区としたゆるぎ館中ノ郭は、段差をもち上下二面に分かれる。3、4ライトレンチは、上、下段を繋ぐように、Cライトレンチは下段の東西方向にそれぞれ設置した。層序は基本的にI～IV層に区分できる。I層は大湯浮石層堆積以前の層序で、さらに2層に区分された。Ia層は黒色を呈し、粘性が有る。C-4グリッドにおいて認められ、厚さは約30cmを測る。Ia層は大湯浮石層で、Cライトレンチ西側において認められた。D-6グリッドで最も顕著に認められ、その厚さは約10cmを測る。Ib層はC-4グリッドの一部で認められた大湯浮石層の二次堆積層と考えられるものである。にぶい黄褐色土で、水による影響が考えられる。III層は大湯浮石層堆積後の堆積土で、さらに2層に区分される。IIIa層は黒色土でしまりがある。IIIb層は黒色土で地山粒を若干含む層である。Cライトレンチ西側で最大厚となり87cmを測る。IV層は地山直上の層で、黒褐色を呈し粘性、しまりがある。

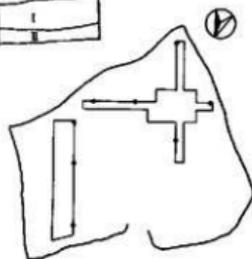
C区としたゆるぎ館北ノ郭は幅狭で、ほぼ平坦である。層序はI～IV層に区分でき、II～IV層が認められるのは縁辺部のみである。I層は黒褐色土で、厚さは約20cmを測る。III、IV層はB区IIIb、IV層に対比できる。

(佐藤 樹)

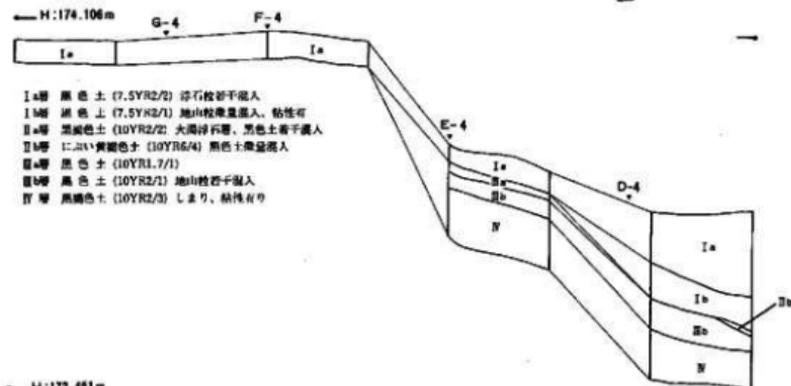
A区基本層序



- I層 黒褐色土 (10YR2/2) 地山の崩壊混入
- II層 黒色土 (10YR2/1) 地山の少量混入、ややしまり有り



B区基本層序

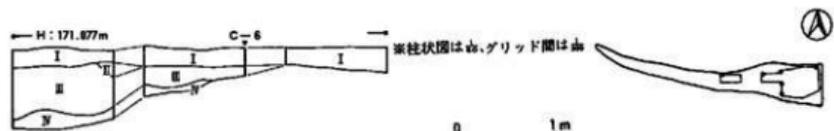


- Ia層 黒色土 (7.5YR2/2) 浮石较多千層入
- Ib層 黒色土 (7.5YR2/2) 地山の少量混入、粘性可
- IIa層 黒褐色土 (10YR2/2) 大層砂石層、黒色土着千層入
- IIb層 濃い黄褐色土 (10YR6/4) 黒色土少量混入
- IV層 黒色土 (10YR1.7/1)
- IV層 黒色土 (10YR2/3) 地山の粘り混入
- IV層 黒褐色土 (10YR2/3) しまり、粘性有り



※柱状図は1/60、グリッド図は1/300

第6図 A、B区基本層序図



- I層 黒褐色土(10YR2/3) 砂子が細かくしまりなし、地山小ブロック若干混入。
- II層 黒色土(10YR1.7/1) 粘粒含有、ややしまり有り。
- III層 黒褐色土(10YR2/2) 粘粒含有、ややしまり有り。
- IV層 黒褐色土(10YR2/3) しまり有り、地山、シラス少量混入。

第7図 C区基本層序図

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

花輪館の一郭である北館は、市街地に近接すること、たくさんの桜が植栽されていることから、桜山公園として市民に親しまれてきた。しかし公園部分の面積が狭く、諸施設の不備・老朽化が目立ち初め、公園拡張・整備の要望が高まってきていた。

昭和57年秋、市当局より、北館からゆるぎ館に及ぶ歴史広場、冒險広場、テニスコートを主体とした公園整備計画が打ち出され、市教育委員会では埋蔵文化財保護の立場からこれに対応することとなった。

整備計画については、本地域が中～近世の跡跡の一部であることを再認識し、館跡としての諸形態を極力保存すること、郭上面への構造物も下部遺構への影響の少ない地点・工法とすること等、埋蔵文化財保護に留意するよう要請、整備計画策定の基礎資料を作成するため、市教育委員会が試掘調査を行なうこととなった。翌58年には第Ⅰ期整備部分の北館北郭の試掘調査を実施、その結果を「花輪館跡試掘調査報告書」(1984-3)として刊行している。

61年秋、第Ⅱ期整備として、北館南郭の整備を62年度に行ないたいとの協議が持ち込まれ、62年6月25日より試掘調査を実施することとなった。なお、この調査では同郭以外に第Ⅲ期整備予定のゆるぎ館をも合わせて調査することとなった。

2. 調査要項

- | | |
|-----------|--|
| 1. 遺跡名 | 花輪館跡 |
| 2. 調査地 | 鹿角市花輪字荒屋敷44他 |
| 3. 調査対象面積 | 9,800㎡ |
| 4. 試掘調査面積 | 563㎡ [A区(北館南郭)320㎡、B区(ゆるぎ館中ノ郭)158㎡、
C区(ゆるぎ館北ノ郭)85㎡] |

5. 調査期間

発掘調査 昭和62年6月25日～昭和62年7月10日

整理・報告書作成 昭和62年11月18日～昭和63年3月31日

- | | |
|----------|-------------------------|
| 6. 調査主体者 | 鹿角市教育委員会 |
| 7. 調査担当者 | 鹿角市教育委員会 社会教育課(主任 秋元信夫) |
| 8. 事業主体者 | 鹿角市建設部 都市整備課 |
| 9. 調査参加者 | |
| 調査指導員 | 富樫泰時(秋田県教育庁文化課 学芸主事) |
| 調査員 | 安村二郎(鹿角市史編さん委員) |

鎌田健一（秋田県立十和田高校 教諭）

成田典彦（鹿角市立尾去沢中学校 教諭）

三ヶ田俊明（小坂町立七滝小学校 教諭）

調査補助員

作業員

佐藤 樹、多賀谷吉朗、佐藤恵留子、三ヶ田晴子、大里敦子
安保シゲ子、安保チヨ、小田チエ、花ノ木君、福島タミ子、
間藤キク、松岡ツギ、松岡リエ、三ヶ田林子、奈良ヨシノ、
奈良アサ、奈良アキ、奈良節子、奈良テル、奈良タキ、
中野孝子

10. 社会教育課

課長	安田孝司
課長補佐	湯沢 勉
文化財係長	柳沢悦郎（庶務担当）
主任	秋元信夫（調査担当）
臨時職員	須田匠人（庶 務）

11. 協力機関・協力者

秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、奈良大学、鹿角市史編さん室

3. 調査の方法

公園整備事業に先立ち、試掘調査を実施し、遺跡保存のための基礎資料を得ることが、この度の調査の主目的であった。このため、整備計画を考慮し、調査区を設定、調査方法も各地区に適したものとした。A区（北館南郭）はテニスコート建設予定地であるため、縦・横に延ばしたトレンチ発掘とし、遺構の重複する部分を拡張した。B区（ゆるぎ館中ノ郭）は東屋建設予定部分、C区（ゆるぎ館北ノ郭）は剔除部分を面的に調査した。

グリッドは、調査区の地形を考慮し、第8、21、26図のように設定した。すなわち、A区N-19'-W、B区N-16'-W、C区N-Sを基準線とする5×5mを1単位とするグリッドとした。杭番号はアルファベット（南北方向）と算用数字で付し、北西隅の杭を以てそれぞれのグリッドを呼称した。トレンチは、このグリッドを利用し、幅2mを原則とした。

表土からの除去作業は全て手掘りによる分層発掘とし、できるだけ上面での遺構確認に努めた。遺構の番号は、各区ごとに、遺構別発見順に付した。

遺構の発掘に関しては、竪穴遺構では4分割法、土壌等については2分割法を原則とした。遺物の取り上げは、遺構外の場合は層ごと・グリット一括、遺構内の場合は1点ずつの図化・レベル実測の後取り上げた。

遺構等の実測は簡易遺方測量を用い、1/20の縮尺で図化した。また写真記録については30

mm判小型カメラ2台を使用し、モノクロ、リバーサル用に使い分けた。

4. 調査の経過

花輪館跡の第2次試掘調査は、昭和62年6月25日から開始され、3ヵ所の調査を終了したのは、同年7月10日であった。以下、調査日誌に基づき、調査の経過を略記する。

6月25日、A区のグリッド設定後、A区南西部のトレンチから粗掘りを開始する。26日にはA区の粗掘りと併行し、B区の刈り払いを行なう。27日には、粗掘り、遺構確認の終了したA区南西部から遺構精査を開始する。

29日にはA区の粗掘りを終了、30日より2班に分かれ、A・B区を併行して調査を行なう。A区では前日に引き続き遺構精査、B区ではグリッド設定後、北東部のグリッドより粗掘りを行なう。また、同時にC区の刈り払いに取りかかる。

7月6日、B区の粗掘り・遺構確認を終了、C区のグリッド設定・粗掘りへと移行する。

9日、A区的全景写真を撮影し、A区の調査を終了する。10日には、B区の遺構精査及びB・C区的全景写真撮影を終え、全ての調査を終了した。

(秋元信夫)

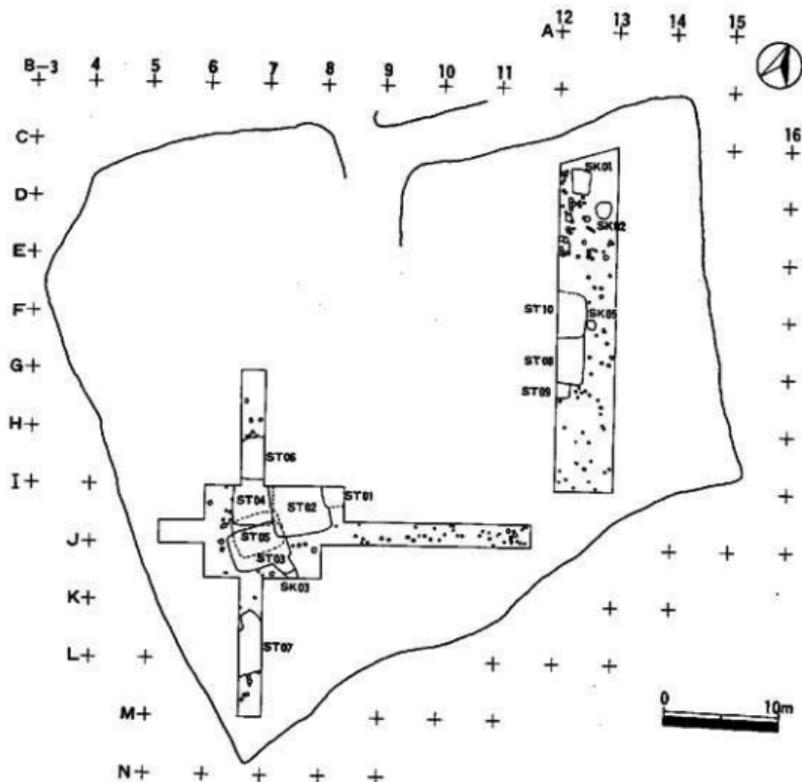
第三章 検出遺構と出土遺物

A区より検出された遺構は竪穴遺構10棟、土壌4基である。これに加えてほぼ全域より柱穴状ピットが検出された。これらに伴って遺構内・外より出土した遺物は陶磁器片25点、古銭20点、銅製品1点、鉄製品12点である。またこの他に縄文土器片2点、石器1点、土師器片1点を出土した。

B区より検出された遺構は土壌1基、溝1条及び柱穴状ピットである。また遺構内・外より出土した遺物は陶磁器片13点、古銭1点、銅製品2点、鉄製品3点である。

C区からは検出された遺構はなく、遺物も出土しなかった。

以下、A区、B区の順に検出遺構及び出土遺物について略述する。



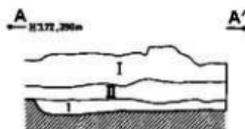
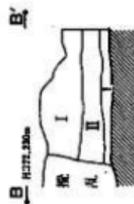
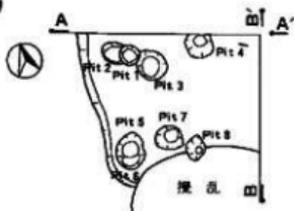
第8図 A区遺構・グリッド配置図

1. A区の検出遺構と出土遺物

(1) 竪穴遺構

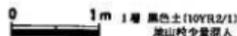
第1号竪穴遺構(第9図)

I ライトレンチ拡張区のI-8グリッドに位置する。2号竪穴遺構と重複し、本遺構が新しい。遺構北側、東側は未発掘で、南側は攪乱されている。平面形は方形を呈すると考えられ、壁高は西壁11.2cmを測る。底面は地山よりなり、小さな起伏があり堅くしまっている。壁はゆるやかに立ち



ピット一覧表 (単位:cm)

Pit No.	1	2	3
縦横	22×22	29×24	28×30
深さ	58.5	59.5	59.4
Pit No.	4	5	6
縦横	24×20	34×30	34×30
深さ	49.7	56.7	53.5
Pit No.	7	8	
縦横	26×18	30×20	
深さ	51.8	60.0	



第9図 第1号竪穴遺構実測図

上がる。堆積土は黒色土の単一層で、人為堆積と考えられる。本遺構より8個のピットが検出された。

遺物は出土しなかった。

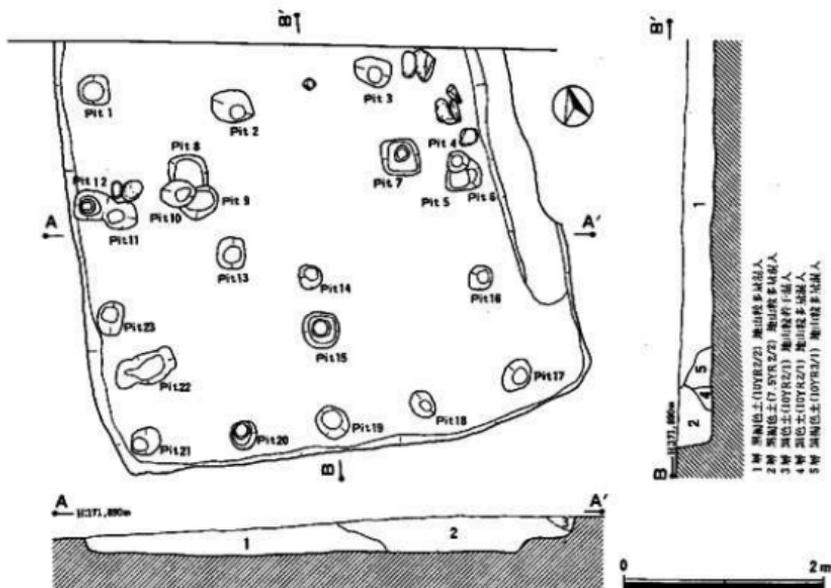
第2号竪穴遺構(第10図、17図6、13)

I ライトレンチ拡張区のI-7、8グリッドに位置する。1、3～5号竪穴遺構と重複し、本遺構は3～5号竪穴遺構より新しく、1号竪穴遺構より古い。遺構北側は未発掘である。平面形は一辺が4.78mの方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東壁32.1cm、西壁17.0cm、南壁31.4cmを測る。底面はやや起伏があり堅くしまっている。各壁隅及びその間の等間隔のピット1、12、23、21、20、19、18、17、16、4(5 or 6)が主柱穴と考えられる。東壁際に幅約50cm、長さ2.59m以上のテラス状施設を有し、底面からの高さは12.2cmを測る。堆積土は5ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

堆積土中より鉄製品(刀子、鉄釘)2点出土した。6は錆化が進んでいるが刀部の先端部分と考えられ、現存長2.6cm、幅1.1cm、厚さ0.6cmを計る。13は鉄釘で断面は四角形を呈し大きさは長さ6.6cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmを計る。

第3号竪穴遺構(第11図、18図1～15)

I ライトレンチ拡張区のI、J-6、7グリッドに位置する。2、4、5号竪穴遺構、3号土壇と重複し、本遺構は4、5号竪穴遺構、3号土壇より新しく、2号竪穴遺構より古い。



ピット一覧表 (単位:cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規模	30×24	36×30	36×20	20×20	11×25	61×11	36×30	36×30	40×30	36×24	31×27	42×30
深さ	64.8	63.8	51.8	36.3	36.0	46.4	33.9	9.5	74.6	69.9	54.8	73.2
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
規模	30×24	22×22	36×30	24×24	34×24	30×20	34×32	28×28	30×24	60×24	32×24	
深さ	82.3	76.4	91.6	52.7	87.7	65.7	95.4	69.0	81.3	64.8	73.0	

第10図 第2号竪穴遺構実測図

平面形は4.93×3.67mの方形を呈し、底面積17.13㎡を測る。長軸方向はN-48°-Eである。壁は北東壁がほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北東壁24.6cm、北西壁11.1cm、南東壁25.8cm、南西壁18.2cmを測る。底面は大きな起伏があり堅くしまっている。各壁隅及びその間の等間隔のピット1、8、14、38、37、35(36)、26、16、15が主柱穴と考えられる。

南東壁東側隅に142×118cmの出入口と考えられる張り出しを有する。張り出し部にはピット9(10)、11の1対のピットが存在する。また南東壁際に幅約10cm、深さ5.7cm、長さ1.93mの溝が存在する。堆積土は3ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

ピット8より15点の古銭がまとまって出土した。内訳は元祐通宝1点、大観通宝1点、嘉泰通宝1点、洪武通宝8点、永楽通宝3点、無文銭1点である。このうち1点(永楽通宝)には紐が結ばれていた。

第4号竪穴遺構(第11図、17図7、8、10)

I ライトレンチ拡張区のH、1-6、7グリッドに位置する。2、3、5、6号竪穴遺構

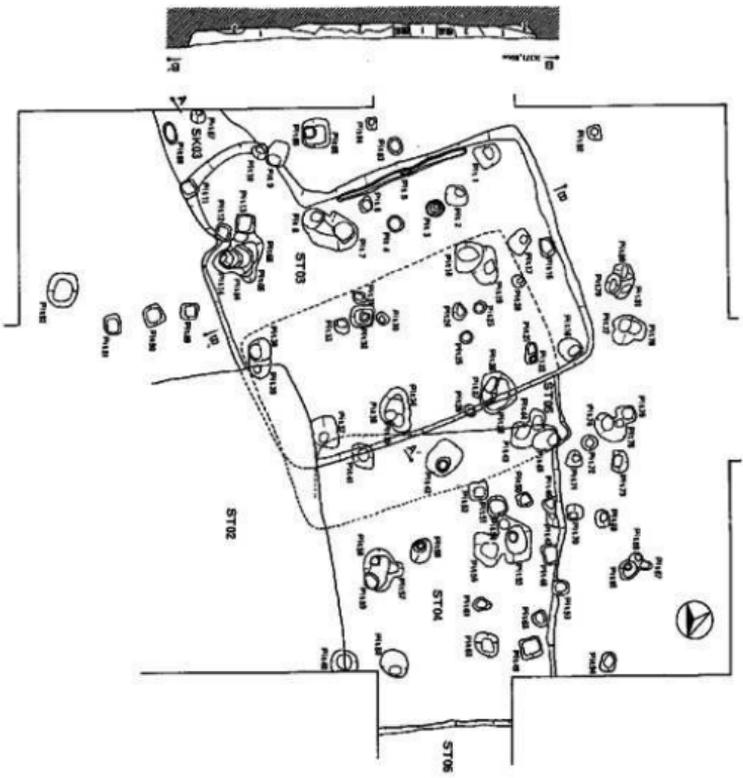


圖11 第3-5号貯穴遺構平面図

第2表 第3～5号竪穴遺構ビット一覧表(単位: cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規模	32×30	30×24	26×24	24×20	16×8	20×18	28×20	30×28	30×24	20×20	22×20	22×20	26×24
深さ	77.4	75.2	14.1	9.5	8.2	29.8	38.8	71.1	20.4	56.6	32.3	20.4	25.8
Pit No.	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
規模	20×14	24×14	30×26	32×26	42×38	52×39	18×18	30×16	14×8	18×18	26×20	18×18	
深さ	80.5	21.8	56.5	21.4	26.1	26.1	21.9	19.8	31.1	10.4	12.8	21.4	55.5
Pit No.	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
規模		54×54	18×14	18×14	18×16	36×28	20×20		38×38	36×28	44×36	30×30	48×30
深さ	57.0	35.2	58.0	16.8	10.0	17.0	59.8	29.7	60.5	81.0	95.6	43.1	42.1
Pit No.	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
規模	38×34	32×30	50×40	36×36	38×23	40×28	20×20	24×16	30×20	30×28	20×20	28×24	26×24
深さ	96.7	68.1	97.6	20.9	22.1	69.7	9.0	10.3	13.1	20.7	10.4	19.2	77.3
Pit No.	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65
規模	40×30		44×36	36×20			20×20	38×38	26×18	30×30	22×20		
深さ	32.7	28.2	85.7	66.2	39.5	94.9	94.6	48.3	69.1	77.2	13.4	54.4	
Pit No.	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78
規模		39×11	19×19	24×18	24×20	24×24	22×22	30×14	48×30		24×20	36×20	39×28
深さ	33.4	24.1	23.9	22.6	44.8	22.2	13.6	9.8	28.1	34.7	28.2	40.5	57.0
Pit No.	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91
規模	28×20	24×20	38×22	20×18	24×20	18×14	40×36	16×16	20×18	30×16	24×22	30×26	28×20
深さ	12.4	79.9	32.4	38.1	29.1	36.1	46.0	65.4	8.6	9.9	19.9	21.1	21.1
Pit No.	92	93	94	95									
規模	48×36	24×20	28×20	33×24									
深さ	15.2	15.8	73.7	61.3									

と重複し、本遺構は5号竪穴遺構より新しく、他の遺構より古い。平面形は一辺が3.46mを測る方形を呈する。遺構北側の一部は未発掘である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西壁6.7cmを測る。底面はやや起伏があり、堅くしまっている。また南壁側の一部に貼り床が施されていた。壁隅のビット45、41、40、49が主柱穴と考えられる。

西壁際底面より鉄製品(刀子2点、鉄釘1点)3点、底面より鉄滓1点を出土した。7、8は刃部先端部で、大きさはそれぞれ長さ5.3cm、6.4cm、幅1.2cm、0.9cm、厚さ0.4cm、0.3cmを計る。10は角釘で長さ4.8cm、幅0.6cm、厚さ0.6cmを計る。

第5号竪穴遺構(第11図)

Iライントレンチ拡張区のI、J-6、7グリッドに位置する。2、3、4号竪穴遺構と重複し、本遺構はいずれよりも古い。平面形は推定規模4.08×3.16mの方形を呈すると考えられ、推定底面積は12.12㎡を測る。長軸方向はN-49°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西壁15.1cmを測る。底面はやや起伏があり、堅くしまっている。ビット39、19、44(43)と確認できなかった北隅のビットを加えた各壁隅のビットが主柱穴と考えられる。

遺物は出土しなかった。

第6号竪穴遺構 (第12図)

6 ライントレンチのH-6グリッドに位置する。4号竪穴遺構と重複し、本遺構が新しい。遺構東、西側は未発掘である。平面形は一边が3.55mを測る方形を呈する。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は北壁7.3cmを測る。底面は小さな起伏があり、堅くしまっている。遺構内より9個のピットが検出された。堆積土は黒褐色土の単一層で、人為堆積と考えられる。

遺物は出土しなかった。

第3表 第6号竪穴遺構ピット一覧表 (単位: cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規模	34×30	24×22	24×20	20×20	28×26	37×39	26×()	20×18	34×32	34×34	26×()	31×()	35×30
深さ	23.1	52.2	24.7	9.7	48.6			8.7	28.6	22.0	23.4	25.9	21.0
Pit No.	14	15	16	17									
規模	24×24	34×28	22×22	22×22									
深さ	24.0	57.1	41.6	18.3									

第7号竪穴遺構 (第12図、17図1、2)

6 ライントレンチのK、L-6グリッドに位置する。本遺構東、西側は未発掘である。平面形は一边が3.92mを測る方形を呈すると思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北壁55.8cm、南壁43.3cmを測る。底面はほぼ平坦でやや軟弱である。北壁東隅に出入口と考えられるスロープ状の張り出し部を有し、その規模は140×143cmを測る。遺構内より5個のピットが検出された。堆積土は8ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

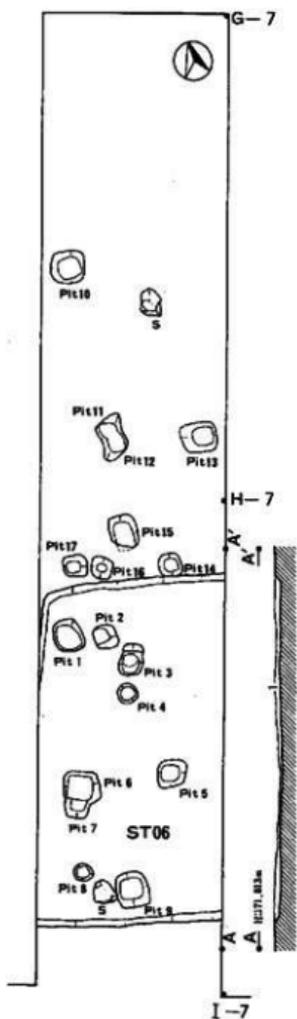
底面より美濃皿1点、堆積土中位より肥前染付皿胴部破片1点を出土した。1は東壁際底面より出土した美濃皿で、高台内に輪ドチ痕が認められる。推定口径11.0cm、底径5.3cm、器高2.6cmを計る。16世紀のものと考えられる。2は中央部中位より出土した肥前染付皿胴部破片で、外面には2重の条線が、内面には2重の条線より上部に文様が描かれている。18~19世紀のものと考えられる。

第4表 第7号竪穴遺構ピット一覧表 (単位: cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規模	32×16	32×16	30×26	30×30	30×28	26×22	20×20	30×39	44×38	40×26	26×26	34×34	32×28
深さ	10.8	5.4	24.3	36.8	69.6	32.2	10.1	13.3	37.9	46.8	47.0	43.3	25.4
Pit No.	14												
規模	34×34												
深さ	29.5												

第8号竪穴遺構 (第13図、18図16)

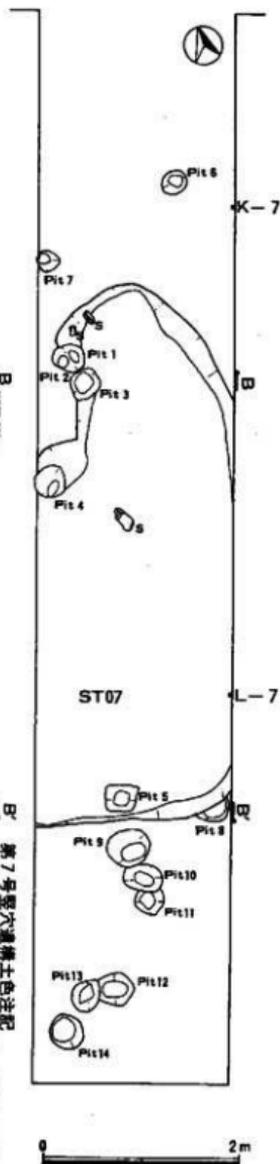
12 ライントレンチのG-12グリッドに位置する。9、10号竪穴遺構と重複し、本遺構は9号竪穴遺構より新しく、10号竪穴遺構より古い。遺構西側は未発掘である。平面形は方形を呈し、



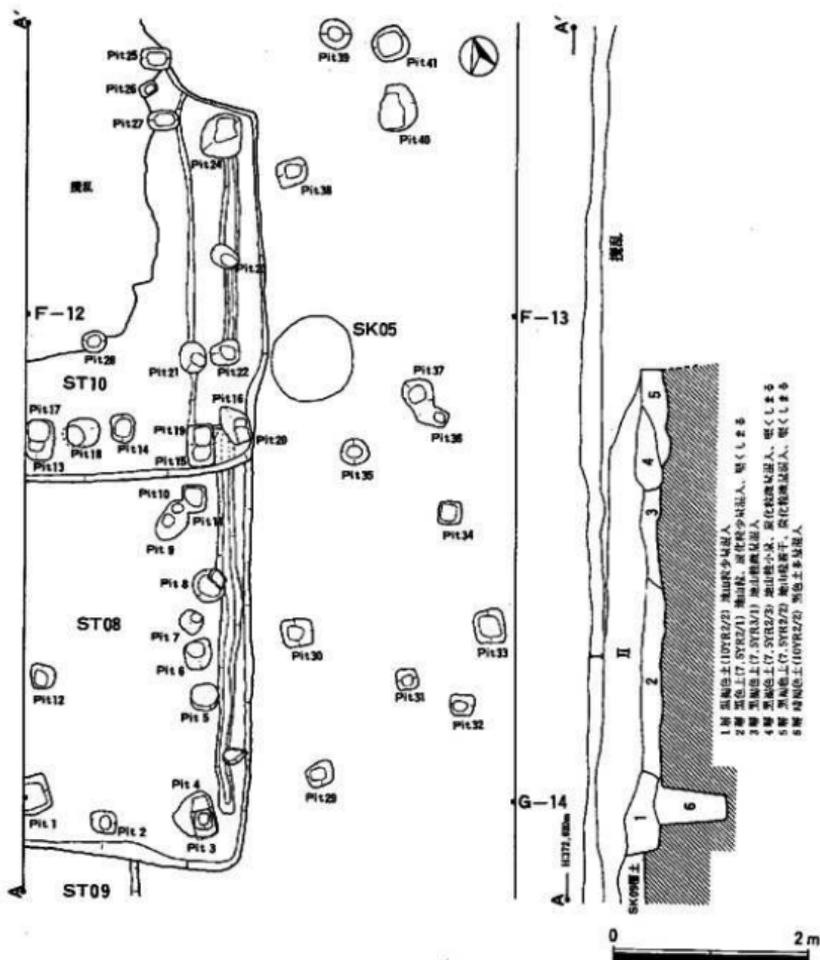
第6号型穴遺構土色注記

1層 黒褐色土(10YR2/2)

- 第7号型穴遺構土色注記
- 1層 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒、灰化物微量混入
 - 2層 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒微量混入
 - 3層 黒褐色土(10YR2/3) 地山粒少量混入
 - 4層 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入
 - 5層 黒褐色土(10YR2/3) 地山粒微量混入
 - 6層 赤色土(7.5YR2/1) 地山粒微量混入
 - 7層 暗褐色土(10YR2/3) 地山粒少量混入
 - 8層 黒褐色土(10YR2/3) 地山粒少量混入
 - 9層 褐色土(10YR4/4) 地山粒多量混入



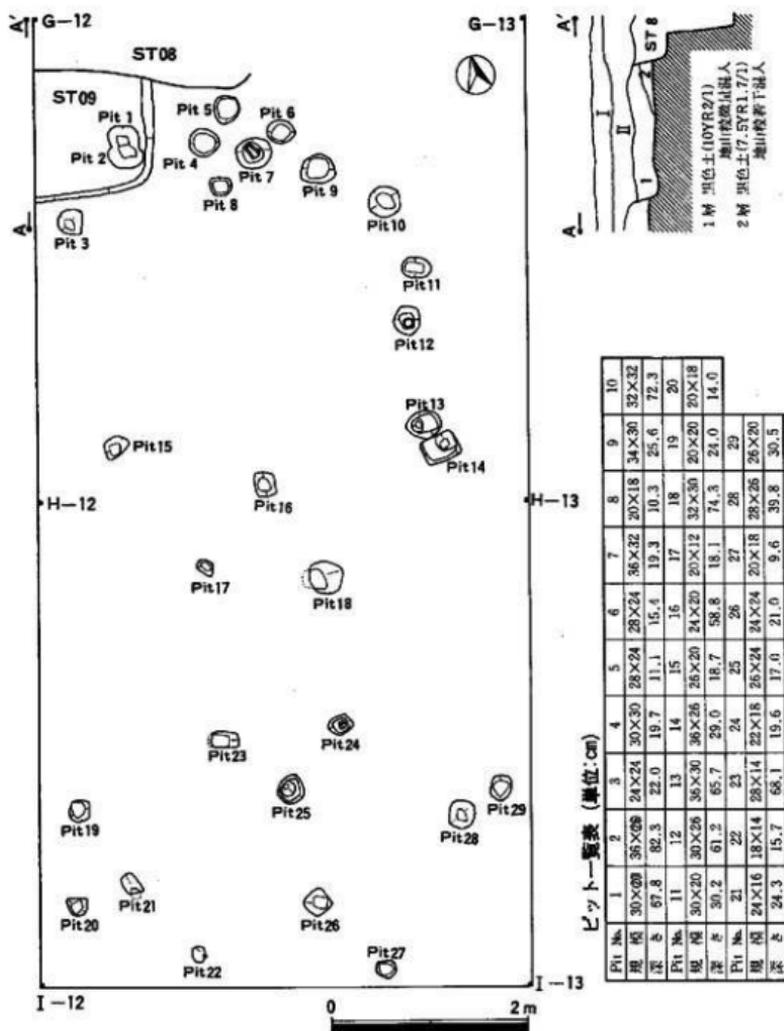
第12図 第6、7号型穴遺構、6ライントレンチ実測図



ピット一覧表 (単位:cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
規格	34×30	24×22	40×30	34×31	28×28	28×28	24×22	34×30	30×24	26×16	28×22	28×24
深さ	65.9	62.2	74.9	72.3	70.4	82.9	66.1	77.0	17.9	19.5	63.0	16.7
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
規格	30×30	28×24	28×26	31×27	30×24	32×28	28×20	28×31	32×26	28×24	30×20	44×40
深さ	28.3	57.5	74.5	54.9	80.6	69.0	61.2	53.7	73.9	58.8	39.2	53.4
Pit No.	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
規格	30×20	18×12	32×20	22×22	26×24	30×30	20×20	24×22	34×30	24×24	28×26	30×20
深さ	56.1	33.1	40.1	32.2	29.3	34.6	18.8	21.2	17.6	13.3	12.2	23.2
Pit No.	37	38	39	40	41							
規格	32×31	30×26	32×30	46×38	36×34							
深さ	23.9	28.7	13.6	43.4	15.7							

第13図 第8～10号型穴遺構実測図



第14図 第9号竪穴遺構、12ライトレンヂ実測図

その推定規模は一辺が4.80mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東壁25.6cm、南壁27.7cmを測る。底面はやや起伏があり、堅くしまっている。各壁隅及びその間の等間隔のビット1～3、5、8、19、14、17が主柱穴と考えられる。東壁際に幅12～20cm、深さ約7cm、長さ4mの溝が存在する。堆積土は3ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

堆積土中より古銭（天聖元宝）1点を出土した。

第9号竪穴遺構（第14図）

12ライトレンチのG-12グリッドに位置する。本遺構西側は未発掘で、北側は8号竪穴遺構により消失しているため、南東部の一部を確認したのみである。新旧関係は本遺構が古い。平面形は方形を呈すると考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東壁11.3cm、南壁7.5cmを測る。底面は大きな起伏があり、堅くしまっている。柱穴は南東壁隅に2個のビットを検出したのみである。堆積土は2ブロックに区分でき、人為堆積と考えられる。

遺物は出土しなかった。

第10号竪穴遺構（第13図）

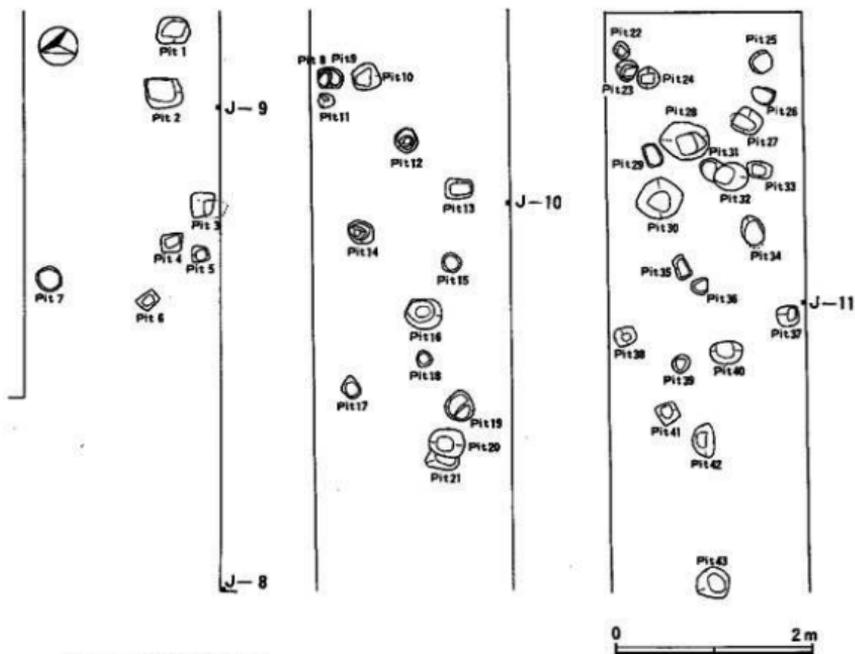
12ライトレンチのE、F-12グリッドに位置する。8号竪穴遺構と重複し、本遺構が新しい。遺構西側は未発掘で、北側は大きく擾乱されている。平面形は一辺が4.19m以上を測る方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は南壁36.4cmを測る。底面はほぼ平坦で、堅くしまっている。ビット13、15、16、18、20～28の13個のビットが本遺構に伴うものと考えられる。東壁際に3.34×0.76mのテラス状施設を有する。底面からの高さは8.7cmを測る。テラス状施設中央、ビット22、24間に幅12～20cm、深さ2.8cmの溝が存在する。堆積土は2ブロックに区分でき、人為堆積と考えられる。

遺物は出土しなかった。

(2) 柱穴群（第11～16図、17図11、12、15、18図17、18）

各トレンチほぼ全域より多数のビットが検出された。これらのビットは規模、深さなどより大部分が柱穴と考えられ、掘立柱建物跡の存在が予想されたが、その形態、規模はつかめなかった。Cライトレンチ北半部から、底面付近に自然石が礎石状に配された9個のビットを確認した。自然石は1～4個使用されており、大きさは10～34cmを測る。

Iライトレンチビット16より鉄製品（鉄釘）1点、12ライトレンチビット21より鉄製品（鉄釘）1点、ビット35より古銭（紹聖元宝、判読不可）2点を出土した。またIライトレンチビット21より縄文土器破片1点を出土した。11はIライトレンチビット16より出土した鉄釘で、断面は四角形を呈する。大きさは長さ7.4cm、幅0.4cm、厚さ0.3cmを計る。12は12ライトレンチビット21より出土した鉄釘である。錆化が進んでいるが角釘で、先端にいくに



ピット一覧表 (単位:cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規模	30×28	36×30	26×22	20×14	18×16	20×16	26×24	18×14	20×18	26×26	14×14	24×24	24×20
深さ	45.6	43.4	34.0	20.9	3.8	18.3	19.2	45.2	28.5	29.4	23.6	24.6	28.0
Pit No.	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
規模	26×20	18×18	36×30	20×18	16×16	32×28	36×28	32×22	14×14	22×18	22×22	22×20	20×14
深さ	24.3	14.5	33.2	13.8	18.5	24.5	37.2	48.2	9.3	14.7	14.9	19.7	32.2
Pit No.	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
規模	26×26	48×40	24×16	40×40	26×22	34×28	24×18	30×20	22×10	16×16	20×20	22×18	18×18
深さ	55.2	34.2	36.5	18.4	16.1	74.0	24.6	23.6	29.3	39.1	25.0	31.8	18.2
Pit No.	40	41	42	43									
規模	32×24	22×20	34×20	34×32									
深さ	20.2	16.5	19.6	46.7									

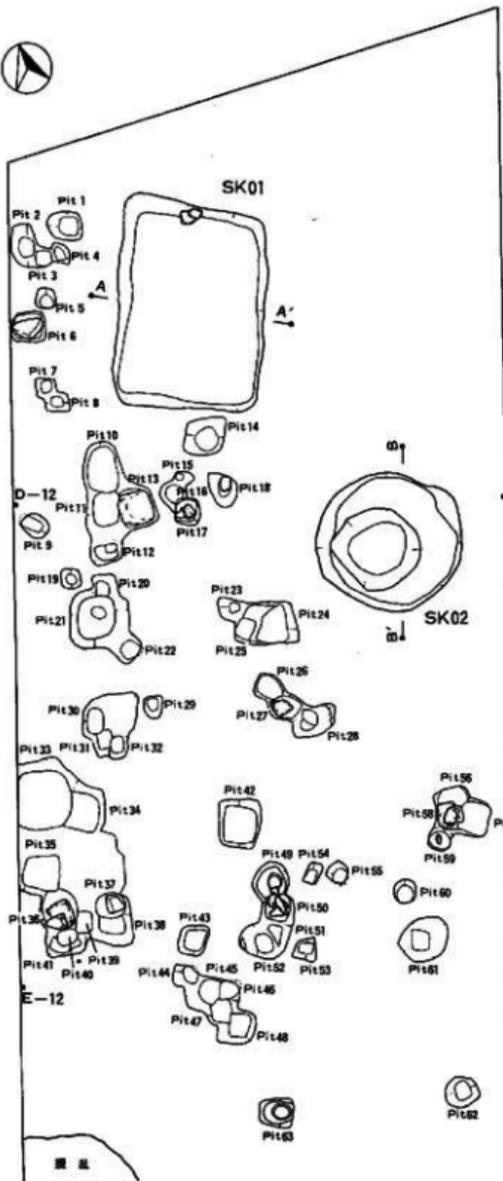
第15図 I ライトレンチ実測図

つれ細くなっている。大きさは長さ10.8cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmを計る。15はI ライトレンチピット21より出土した深鉢と考えられる縄文土器胴部破片である。3条の平行沈線間にL R 縄文が充填されている。縄文時代後期前葉と考えられる。

(3) 土 壌

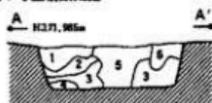
第1号土壌 (第16図、17図3、13、16)

12ライトレンチ北端のC-12グリッドに位置し、本遺構南東隅に2号土壌が隣接する。平



第16図 第1～3、5号土坑、12ライトレンヂ実測図

第1号土坑断面図



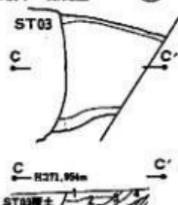
- 1層 黒褐色土(10YR2/2)
- 2層 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒少量混入
- 3層 黒褐色土(10YR2/3) 地山粒、シラス混入
- 4層 暗褐色土(10YR3/4) シラス混入
- 5層 黒色土(10YR2/2) 地山粒混入
- 6層 黒色土(10YR2/1) 地山粒、シラス少量混入

第2号土坑断面図



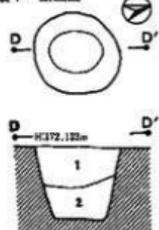
- 1層 褐色土(10YR4/4) 黒色土を以、地山ブロック少量混入、堅くしめる
- 2層 暗褐色土(10YR2/3) 地山粒少量、シラス微量混入、堅くしめる
- 3層 黒褐色土(10YR2/3) 地山粒、軟土、炭化物混入
- 4層 濃い黒褐色土(10YR5/4) シラス層で堅くしめる、地山粒を微量混入
- 5層 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒、シラス、炭化物微量混入
- 6層 暗褐色土(10YR3/4) 地山粒少量混入

第3号土坑平・断面図



- 1層 黒色土(7.5YR2/1) 軟弱、地山粒少量混入
- 2層 暗褐色土(10YR3/3) 堅くしめり、パヤパヤする
- 3層 暗褐色土(10YR2/3) 粘性强り
- 4層 黒色土(10YR2/1) 堅くしめり、地山粒を混入する

第5号土坑平・断面図



- 1層 暗褐色土(10YR3/3) 地山ブロック、地山粒を少量混入
- 2層 黒褐色土(10YR2/2) 地山ブロック、地山粒を少量混入



第5表 12ライトレンチビット一覧表 (単位: cm)

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規模	36×30	44×24	24×28	20×18	20×20	32×30	20×18	22×18	26×24	52×40		32×30	51×40
深さ	35.9	16.4	27.2	15.5		22.0	30.2	13.0	42.8	54.0	47.2	63.1	26.9
Pit No.	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
規模	36×30	19×15	1×26	26×24	40×26	20×20	24×28	60×60	30×28	28×20	39×32		39×24
深さ	79.6	28.8	32.6	21.4	26.8	26.0	23.5	11.1	31.9	29.0	46.5	46.5	11.9
Pit No.	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
規模	38×28	42×24	24×18	40×26	33×23	28×26	38×()	56×56	()×48	52×42	39×()	52×()	
深さ	39.8	41.7	34.7	57.9	28.9	37.2	93.2	41.4	28.4	20.6	37.6	26.8	34.2
Pit No.	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
規模	42×()		49×43	32×20	28×22		()×25	32×32	38×36	42×37	()×33	()×34	46×38
深さ	33.8	45.0	58.2	23.2	73.0	33.8	67.9	16.7	22.9		40.5	20.4	38.8
Pit No.	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63		
規模	22×22	22×14	21×20	36×()	38×()		23×23	24×22	50×42	34×32	34×30		
深さ		11.9	12.4	23.6	45.0		20.1	10.9	34.2	39.6	40.0		

面積は2.06×1.49mの方形を呈し、深さ47.4cm、底面積2.4㎡を測る。長軸方向はN-15°-Wである。底面はほぼ平坦で堅くしまっており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は7ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

北壁際中位より14~16cm大の自然石2個、南壁際中位より鉄製品(火打金)1点、堆積土上位より青磁碗底部破片1点を出土した。また堆積土中位より石匙1点を出土した。13は火打金で、三角形を呈しており頂角部分に0.15cmの孔を穿っている。大きさは底辺長5.8cm、高さ3.2cm、厚さ0.4cmを計る。3は青磁碗底部破片で、14世紀後半~15世紀前半のものと考えられる。16は縦形石匙で、両側縁に刃部が作り出されている。

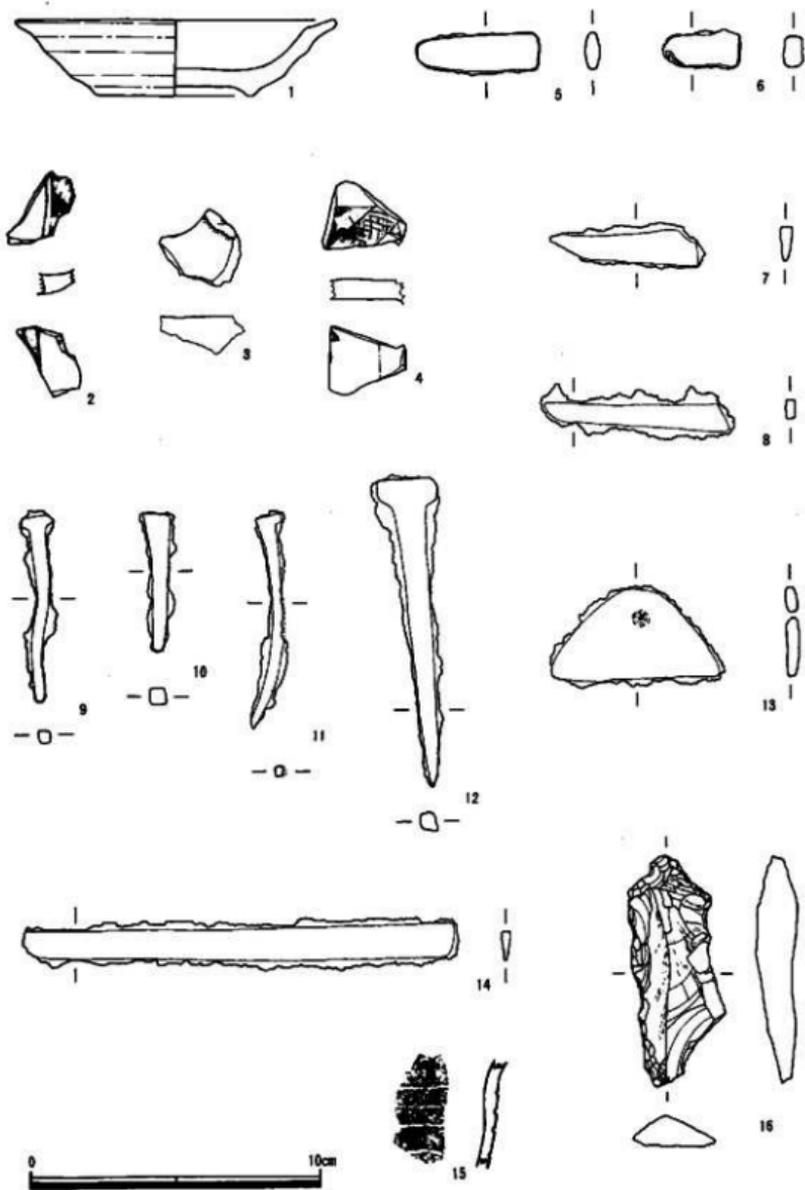
第2号土窟(第16図、17図5)

12ライトレンチ北側のC、D-12グリッドに位置する。遺構上部は擾乱を受けており、確認できたのは地山面より若干低い面である。平面形は1.54×1.42mの円形を呈し、深さ14.3cm、底面積1.2㎡を測る。底面南壁寄りに81×76cmの円形を呈する掘り込みを有し、二段構造となる。確認面から最深部までの深さは31.1cmを測る。上段の底面南側は北から南側へゆるやかに傾斜する。下段の底面は鍋底状を呈し、やや軟弱である。堆積土は7ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

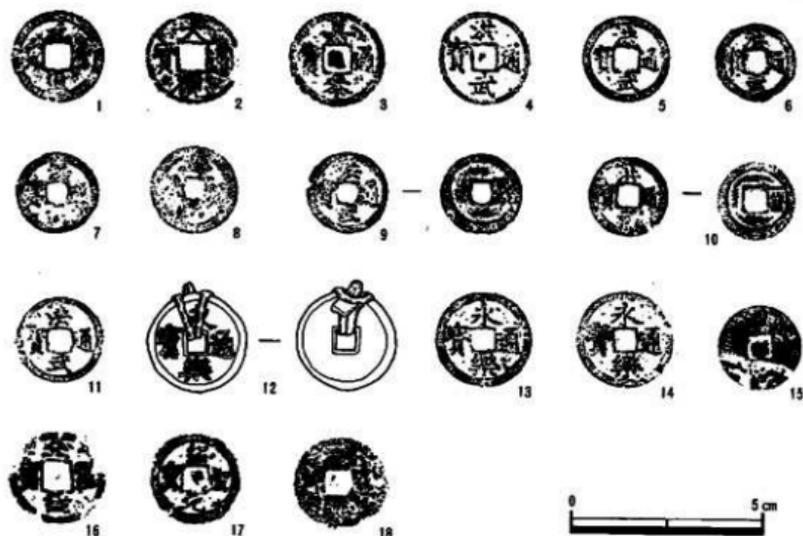
堆積土中より鉄製品(刀子)1点を出土した。錆化が進んでいるが刃部の先端部分である。大きさは長さ4.2cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmを計る。

第3号土窟(第16図、17図14)

12ライトレンチ拡張区のJ-7グリッドに位置する。3号整穴遺構と重複し、本遺構が古い。遺構南東側は未発掘である。平面形は短径1.17mを測る梅円形を呈すると考えられる。長



第17图 A区遗址内出土陶磁器、铁制品、土器、石器实测图



第18図 A区遺構内出土古銭

第6表 遺構内出土古銭一覽表

図 No	名 称	出 土 地 点	計 測 値 (単位: mm, g)				
			外 径	外 縁 厚	外 縁 幅	内 径	重 量 (g)
1	元 祐 通 宝	3号竪穴	23.4	1.3	2.5	6.7	3.4
2	大 観 通 宝	3号竪穴	24.2	1.0	1.0	6.7	2.6
3	嘉 泰 通 宝	3号竪穴	24.6	1.0	2.2	6.6	3.0
4	洪 武 通 宝	3号竪穴	24.2	1.3	1.2	6.0	3.6
5	洪 武 通 宝	3号竪穴	22.5	1.6	2.3	5.9	3.5
6	洪 武 通 宝	3号竪穴	20.2	1.2	2.2	6.1	2.4
7	洪 武 通 宝	3号竪穴	20.7	1.7	2.2	4.9	3.7
8	洪 武 通 宝	3号竪穴	22.8	1.3	2.9	5.0	3.7
9	洪 武 通 宝	3号竪穴	21.0	1.6	2.7	4.8	3.6
10	洪 武 通 宝	3号竪穴	22.5	1.8	2.3	5.3	3.7
11	洪 武 通 宝	3号竪穴	22.4	1.2	1.8	5.8	3.1
12	永 楽 通 宝	3号竪穴	25.0	1.5	2.2	5.3	4.6
13	永 楽 通 宝	3号竪穴	25.0	1.8	2.0	5.4	5.1
14	永 楽 通 宝	3号竪穴	24.9	1.8	2.0	5.3	4.9
15	無 名 銭	3号竪穴	21.7	1.0		5.9	2.1
16	天 聖 元 宝	8号竪穴	23.5	1.0	1.8	7.1	
17	紹 聖 元 宝	125イントレンチビット35	23.6	1.3	2.2	6.1	2.6
18	判 読 不 可	127イントレンチビット35	23.8	0.8	1.4	6.2	1.9

軸方向はN-50°-Wである。底面は鍋底状を呈し、堅くしまっている。壁はやや緩やかに立ち上がる。堆積土は4ブロックに区分でき、自然堆積と考えられる。

底面より鉄製品(刀子)1点を出土した。大きさは長さ14.8cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmを計る。

第5号土溝(第16図、17図4)

12ライントレンチ中央のF-12グリッドに位置し、西側に10号竪穴遺構、南西側に8号竪穴遺構が隣接する。平面形は0.90×0.83mの円形を呈し、深さ77.8cmを測る。底面は南から北側へ若干傾斜しており、平坦で堅くしまっている。壁は直線的でやや急に立ち上がる。堆積土は2ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

堆積土中より肥前染付底部破片1点を出土した。見込に文様を描き、高台内に条線を描いている。18-19世紀のものと考えられる。

(4) 遺構外出土遺物

i) 陶磁器(第19図)

遺構外から出た土した陶磁器は、青磁、肥前染付、唐津で合計21点を数え、その大部分は肥前染付である。

青磁(2)

皿の胴部破片1点が出土した。無文で釉調は緑灰色を呈する。15世紀のものと考えられる。

肥前染付(1、3-14、16-21)

皿 1は高台部から内湾しながら立ち上がる。内面に草花文が描かれており、見込は若干盛り上がっている。17世紀中頃のものと考えられる。7は角皿で格子状の透しが施されている。内面に雷文、外面に2重の条線が描かれている。18-19世紀のものと考えられる。

鉢 3は大鉢口縁部破片である。口縁部は直線的に立ち上がると考えられる。内面には唐花文が描かれている。17世紀中頃のものと考えられる。

碗 口縁部が垂直気味に立ち上がるもの(5、6、8)。外面には人物文(5)などが描かれており、内面には1-4重の条線、口縁部直下の2重の条線間に雷文(8)などが描かれている。

内湾しながら立ち上がるもの(11)。外面には唐花文、内面には口縁部直下の条線以下に蓮花状文などが描かれている。

口縁部が逆反り気味になるもの(10)。外面には蓮花状文、内面には2重の条線下に文様が描かれている。

底部破片(18、20)。18は高台部、底部外面に条線を描き、高台部外面の一部は無釉で



第19图 A区遺構外出土陶磁器実測図

ある。20は外面に草花文、内面には条線とその内部に文様を描いている。見込には砂目痕が認められる。

その他に口縁部破片(4、9)2点、胴部破片(16、17)2点が出土した。

これらの肥前染付碗は、18~19世紀のものと考えられる。

徳利 4点(12~14、21)出土した。12~14は胴部破片で、外面には条線、唐草文などが描かれており、内面は無軸である。21は底部破片で、高台部外面に条線が描かれており、内面は無軸である。18~19世紀のものと考えられる。

唐津(15)

碗の胴部破片1点が出土した。器面には白化粧土で波目文様を描いている。17~18世紀のものと考えられる。

II) 古銭(第20図1、2)

I-6グリッドより永楽通宝1点、F-12グリッドより寛永通宝1点を出土した。寛永通宝は、新寛永銭(背文)である。大きさは永楽通宝が外径24.8mm、外縁幅2.4mm、外縁厚1.3mm、内径5.3mm、重さ2.4g、寛永通宝が外径24.9mm、外縁幅2.4mm、外縁厚1.4mm、内径5.7mm、重さ3.7gを計る。

III) 銅製品(第20図5)

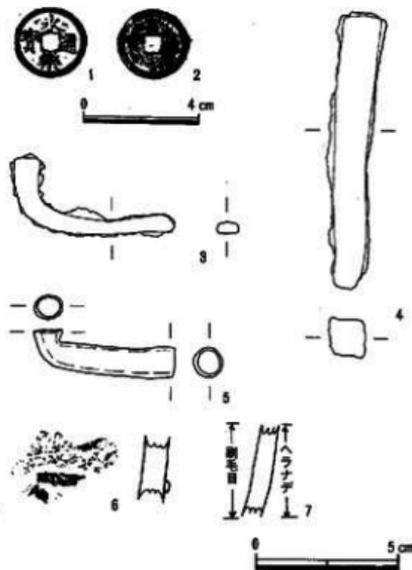
J-6グリッドよりキセル1点が出土した。雁首の部分で、大きさは長さ4.9cm、重さ10.1gを計る。火皿、ウラ取り付け部の径はともに1.0cmを計る。

IV) 鉄製品(第20図3、4)

E-12、I-9グリッドより鉄釘をそれぞれ1点出土した。断面はともに四角で、3は長方形を呈し折れ曲っている。大きさは3が長さ6.7cm、幅0.8cm、厚さ0.4cm、4が長さ9.6cm、幅1.2cm、厚さ1.2cmを計る。

V) 土器(第20図6、7)

E-12グリッドより縄文土器破片1点、C-7グリッドより土器器破片1点を出土した。6は深鉢と考えられる胴部破片で、LR縄文を施文後粘土經を貼り付けている。縄文時代中期と考えられる。7は壺形と考えられる胴部



第20図 A区遺構外出土古銭、銅製品、鉄製品、土器実測図

破片で、内面は刷毛目、外面はヘラナデにより調整されている。

2. B区の検出遺構と出土遺物

(1) 柱穴群 (第22、23図)

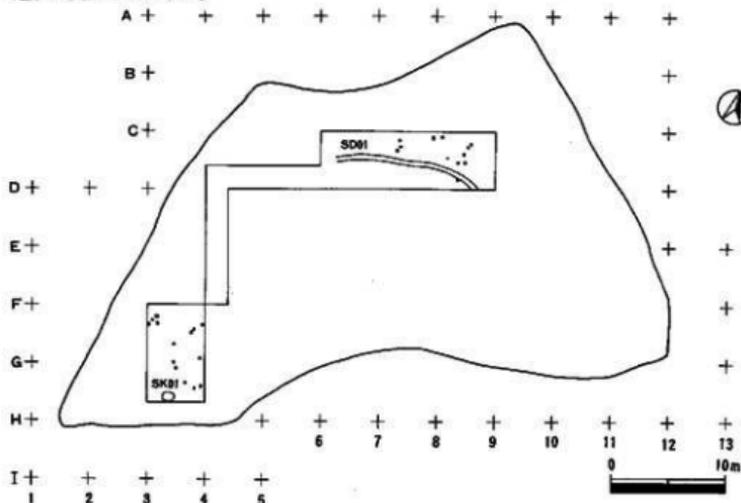
3 ライントレンチほぼ全域より15個、C ライントレンチ東側より10個の柱穴状ピットが検出され、獨立柱建物跡の存在が予想されたが、その形態、規模は明らかにできなかった。3 ライントレンチ柱穴群のピットは、大部分が方形を呈し、規模24cm前後、深さ25~36cmが多い。C ライントレンチ柱穴群のピットの規模も24cm前後が多い。C ライントレンチのピット2より鉄製品(火打金?) 1点が出土した。破片のため形状、大きさは不明であるが、縁辺はゆるい曲線状となり、厚さ0.6cmを計る。

(2) 土 壌

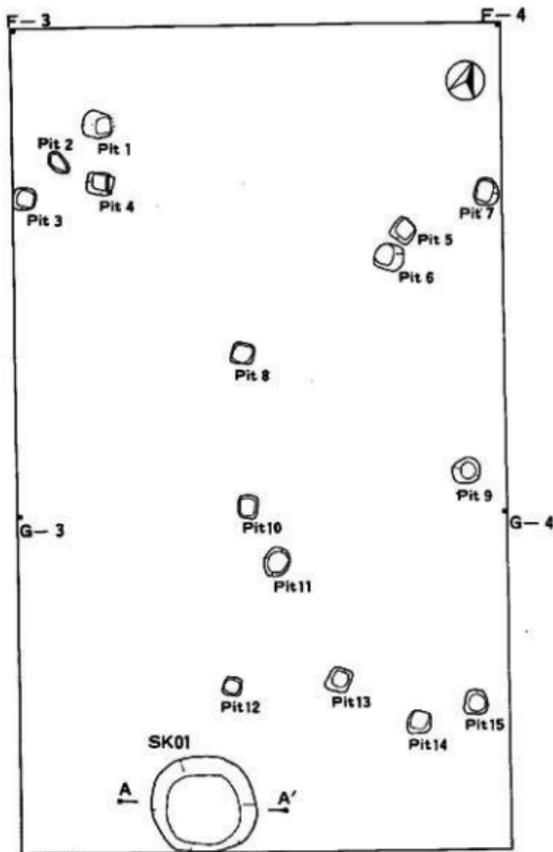
第1号土壌 (第22図)

3 ライントレンチ南端のG-3グリッドに位置する。平面形は1.07×0.98mの円形を呈し、深さ43.6cm、底面積0.44㎡を測る。底面はシラス(鳥越火山灰)よりなり、ほぼ平坦である。南壁は直線的でほぼ垂直に立ち上がる。底面、壁ともやや軟弱である。堆積土は4ブロックに区分でき、自然堆積と考えられる。

遺物は出土しなかった。



第21図 B区遺構・グリッド配置図



第1号土壌断面図



- 1層 黒褐色土(7.5YR3/2)
 2層 黒褐色土(10YR3/2)
 3層 暗褐色土(10YR3/4)
 シラス混入
 4層 褐色土(10YR4/4)
 シラス混入

ピット一覽表 (単位:cm)	
Pit No.	1 2 3 4 5 6 7 8 9
層 厚	30×25 25×16 22×20 24×22 24×22 30×26 25×24 24×22 23×26
深 さ	61.3 9.8 28.8 48.1 28.0 36.9 36.7 17.1 31.5
Pit No.	10 11 12 13 14 15
層 厚	24×20 32×24 18×18 24×24 24×24 25×24
深 さ	35.9 15.4 25.3 65.1 32.6 17.5

第22図 第1号土壌、3ライトレンヂ実測図



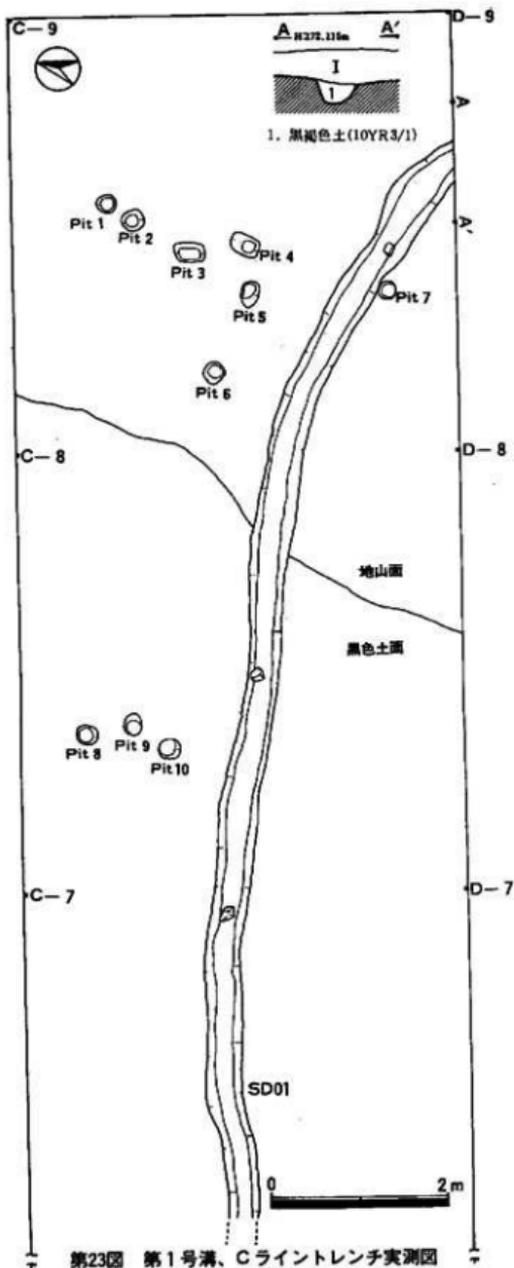
(3) 溝

第1号溝 (第23図)

Cライトレンヂをほぼ東西に横走するようにC-6~8グリッドに位置し、さらに西方向へ延びるものと考えられる。幅34~52cm、深さ14.1~26.6cmを測る。底面は、東側は地山より、西側は黒色土よりなり、鍋底状を呈する。大きな起伏がありやや軟弱で、東から西へ若干傾斜している。また部分的に砂が薄く堆積していた。堆積土は黒褐色土の単一層である。

底面及び底面直上より13~21cm大の自然石3個を出土した他は、遺物は出土しなかった。

(4) 遺構外出土遺物



第7表 Cライトレンチ
ピット一覧表(単位:cm)

Pit No.	1	2	3	4
規模	22×20	24×24	34×24	34×24
深さ	59.4	44.4	31.4	22.6
Pit No.	5	6	7	8
規模	30×20	22×22	20×20	24×22
深さ	13.4	14.8	24.5	42.2
Pit No.	9	10		
規模	24×20	24×24		
深さ	41.9	49.4		

1) 陶磁器 (第24図)

遺構外から出土した陶磁器は13点で、全て肥前染付で、18~19世紀のものと考えられる。

皿 5点(7~9、11、12)出土し、全て底部破片である。

11は角皿で貼付高台である。

碗 外反気味に立ち上がるもの(4)。外面には条線下に網目文、内面には細の狭い条線間に網目文を描いている。

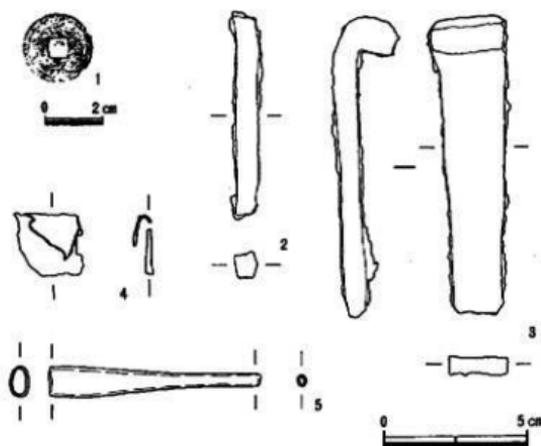
内湾しながら立ち上がるもの(1、2、6)。1は外面に唐草文、内面には草花文を描いている。2は口縁部を外側に折り返しており、内面には二重網目文が描かれている。6は底部破片で、見込には蛇ノ目軸ハギ痕が認められ、高台は無軸である。

口縁部が端反りになるもの(3、5)。

底部破片(10)。見込には菊



第24图 B区道槽外出土陶磁器实测图



第25図 B区遺構外出土古銭、鉄製品、銅製品実測図

花文、高台内には角銘が描かれている。

鉢 1点 (13) が出土した。内面には草花文が描かれており、高台内は無軸である。

ii) 古銭 (第25図 1)

D-4グリッドより1点出土した。銘文は寛永通宝で、大きさは外径24.4mm、外縁幅2.2mm、外縁厚0.9mm、内径6.1mm、重さ2.0gを計る。

iii) 銅製品 (第25図 4、5)

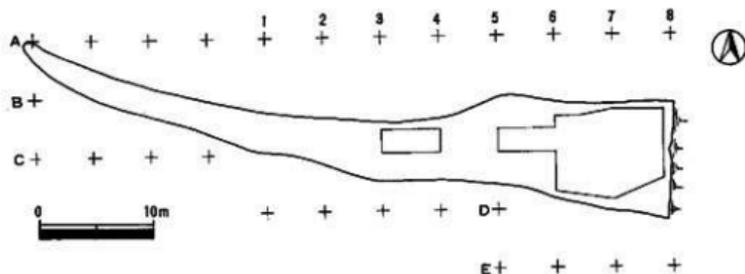
2点出土した。5はC-8グリッドより出土したキセルである。吸い口の部分で、接合痕が明瞭に残っている。大きさは長さ7.3cmを計る。4はC-7グリッドより出土した銅製品である。板状のものを折り曲げて作られており、0.9×0.3cmの長方形の孔が穿たれている。厚さは0.1cmを計る。

iv) 鉄製品 (第25図 2、3)

鉄釘 C-7グリッドより1点 (2) 出土した。断面は四角形を呈し、大きさは長さ6.9cm、幅0.8cm、厚さ0.7cmを計る。

楔 F-3グリッドより1点 (3) 出土した。頭部から先端部に行くにつれ幅がやや狭くなっている。横断面はL字形を呈する。大きさは長さ10.3cm、頭部幅2.6cm、厚さ0.6cmを計る。

(佐藤 樹)



第26図 C区グリッド配置図

第IV章 調査のまとめ

この度の調査の目的は、公園整備計画区域内である花輪館跡の一部、北館南郭～ゆるぎ館の試掘調査を実施し、公園整備計画の基礎資料を得ることであった。このため、調査区の設定にあたっては整備計画を考慮し、構造物の建築予定地や現況の変わるおそれのある部分など3カ所の調査を行なった。なお、便宜的に北館南郭をA区、ゆるぎ館中ノ郭をB区、ゆるぎ館北ノ郭をC区とした。各区の発掘面積はA区320㎡、B区158㎡、C区85㎡で、総発掘面積は563㎡であった。

A区からは、竪穴遺構10棟、土壇4基、柱穴状ピット189個が検出され、遺構内・外より陶磁器25点、古銭20点、銅製品1点、鉄製品12点他縄文土器片2点、石器1点、土師器片1点の出土があった。

竪穴遺構は、竪穴住居跡、方形竪穴遺構、建物遺構とも称呼されている中世の遺構で、竪穴内に炉やカマドを有しないことを特徴とする。A区において検出された竪穴遺構は一辺3.16～4.80mを測り、第3、7号竪穴遺構においては出入口と考えられる張り出し部を有する。この張り出し部は、他の竪穴遺構においても、その未掘部分に有する可能性がある。これらの竪穴遺構は、A区南西部及び東部から密集して検出されているが、A区に均一に設定されたトレンチではないこと、北館南郭の北東部1/3程は土取りにより消失していること等より、郭内における分布状況を明確にし得なかった。竪穴遺構の性格については住居跡、家畜小屋、倉庫、簡易宿舍等の諸説がある。本遺跡の場合、掘立柱建物跡を構成すると考えられる柱穴状ピットが検出されているが、一定区域にのみ偏在し、棟数も少ないことから、竪穴遺構もまた広義の住居施設と考えられる。厨房設備がなく、出土品も少ないのは、これらの遺構が日常的なものではなく、臨時的な機能を有していたためと考える。

柱穴状ピットは発掘区ほぼ全域から検出されているが、西部から南西部の分布密度が高く、この部分に数棟の掘立柱建物跡の存在が予想される。

A区の遺構の構築・廃棄時期については、その出土遺物が少なく、明確にできない。ただ、第3号竪穴遺構ピット8内より15点の古銭（元祐通宝、大観通宝、嘉泰通宝、無文銭各1点、洪武通宝8点、永楽通宝3点）、第7号竪穴遺構底面より16Cの美濃皿、第8号竪穴遺構より1点の古銭（天聖元宝）が、また第1号土壇より14C後半～15C前半の青磁碗1点の出土があり、これらの遺物及び遺構の重複関係から、A区の遺構のほとんどは室町～安土桃山時代に位置づけられると考えられる。なお、遺構外からの寛永通宝、17～19Cの肥前染付、唐津の出土は遺構の有無は別として、本郭が江戸時代においても、花輪館の一郭として使用されていたことを物語っている。

B区からは、土壘1基、溝1条、柱穴状ピット25個が検出され、遺構内・外より陶磁器13点、古銭1点、銅製品2点、鉄製品3点の出土があった。

柱穴状ピットは、B区南西端の微高地及び北部の下段において検出された。これらのピットの大部分は、その規模及び配列から、建物跡の柱穴と考えられる。北館及び御蔵の下を望む南西端微高地とゆるぎ館東ノ郭・北ノ郭の一望できる下段に掘立柱建物が構築されていたものと考えられる。

B区遺構より、その構築時期を推定できる遺物の出土はない。しかし、遺構外出土遺物が古銭（寛永通宝）及び18～19Cの肥前染付のみで、中世に遡る遺物の出土がないことから、これらの遺構は江戸時代以降に位置づけられると考えられる。

C区からは、遺構、遺物とも確認されていない。本郭東側に空堀を挟み対峙していたゆるぎ館東ノ郭上面からは、昭和55年の調査において2基の竪穴遺構と1基の屋外炉が検出されていることから、本郭東部の土取り部分に何らかの遺構があった可能性もある。

これまでの調査により、花輪館跡からは、縄文時代中～後期の土器・石器、土師器・須恵器、中～近世の陶磁器の出土があり、この台地がかなり古くから使用されていたことが窺える。しかし、城館としての機能がいつまで遡るのか、その造営期については、空堀や郭縁辺部にまで調査が及んでいないことから、明らかにできない。

鹿角に所在する大規模な館跡については、近年、全郭が同時に構築、使用されたものではなく、古代から近世に至る長い期間を要し構築・廃棄を繰り返し、その結果として広範囲を占める館跡となったという考えが一般的となっている。本館跡においても、ゆるぎ館東ノ郭、北館南郭、ゆるぎ館中ノ郭の遺構及び遺物に時代差があり、各時代に適した部分を空堀で区切り、あるいは補修・強化し、使用したのと考えられる。

(秋元信夫)

参考・引用文献

- 常石英明 『日本陶器の鑑定と観賞』 金園社 1980年
- 矢部倉吉 『古銭と紙幣—収集と鑑賞—』 金園社 1973年
- 佐賀県立九州陶磁文化館 『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁』 1984年
- 浪岡町教育委員会 『浪岡城跡Ⅴ』 1983年
- ◇ 『浪岡城跡Ⅵ』 1984年
- ◇ 『浪岡城跡Ⅶ』 1985年
- ◇ 『浪岡城跡Ⅷ』 1986年
- ◇ 『浪岡城跡Ⅸ』 1988年
- 八戸市教育委員会 『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅶ』 1986年
- 鹿角市史編さん室 『鹿角市史』 第一巻 1982年
- ◇ 『鹿角市史』 第二巻上 1986年
- 鹿角市教育委員会 『新斗米館跡(Ⅱ)』 1981年
- ◇ 『花輪館跡試掘調査報告書』 1984年



花輪館跡遠景

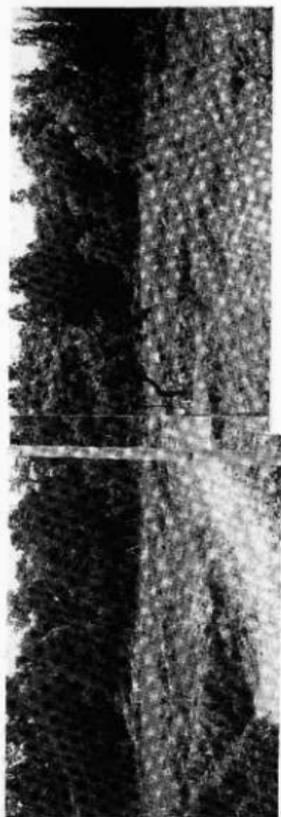


ゆるぎ館、樋口館



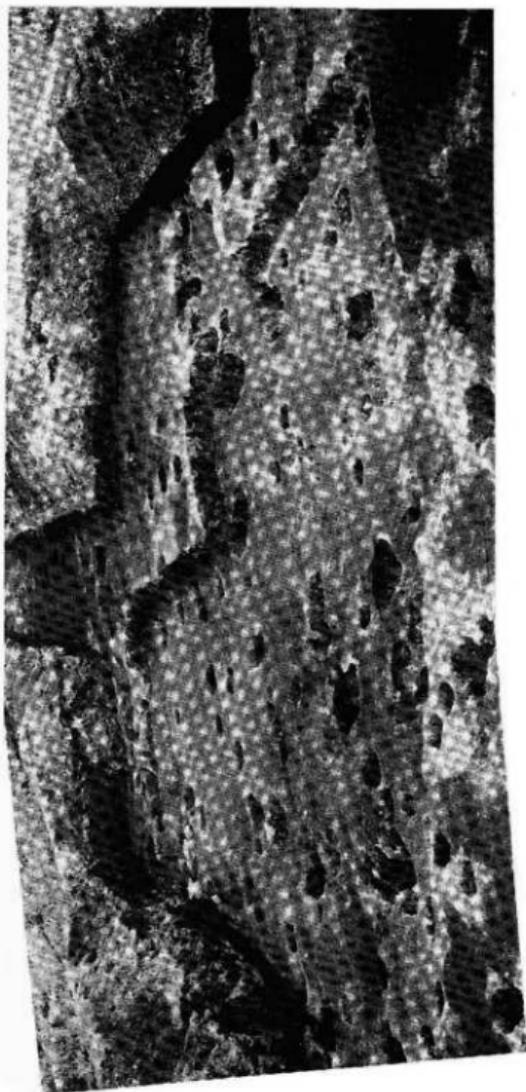
ゆるぎ館

PL1 花輪館跡現況

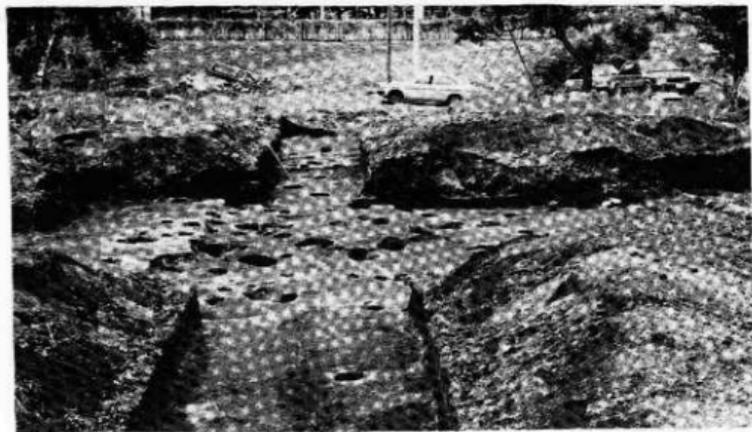


▲ A区全景

▼ 第1~5号竖穴遗址、
第3号土窟



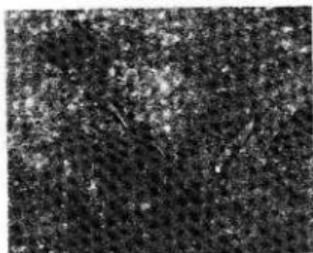
PL 2 A区全景、第1~5号竖穴遗址



第2～6号竖穴遺構



第3～7号竖穴遺構



第4号竖穴遺構遺物出土状況

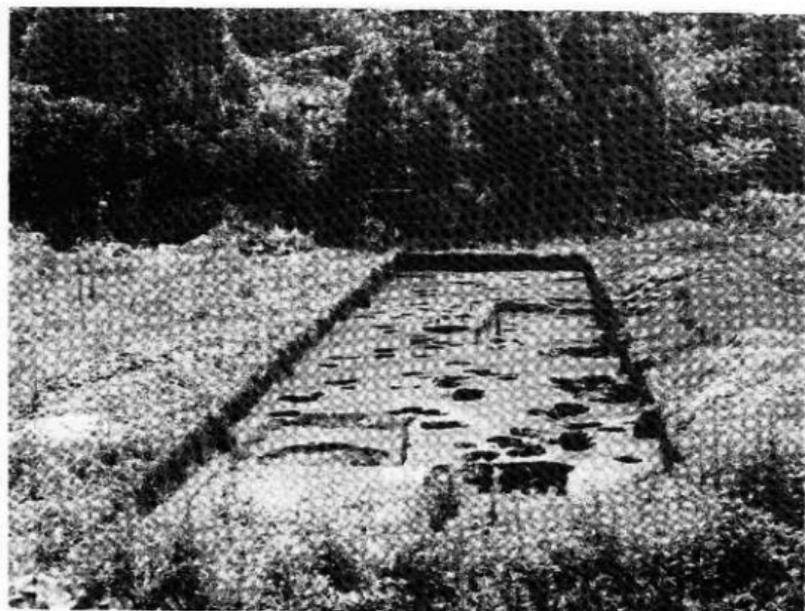


作業風景

PL 3 A区第2～7号竖穴遺構

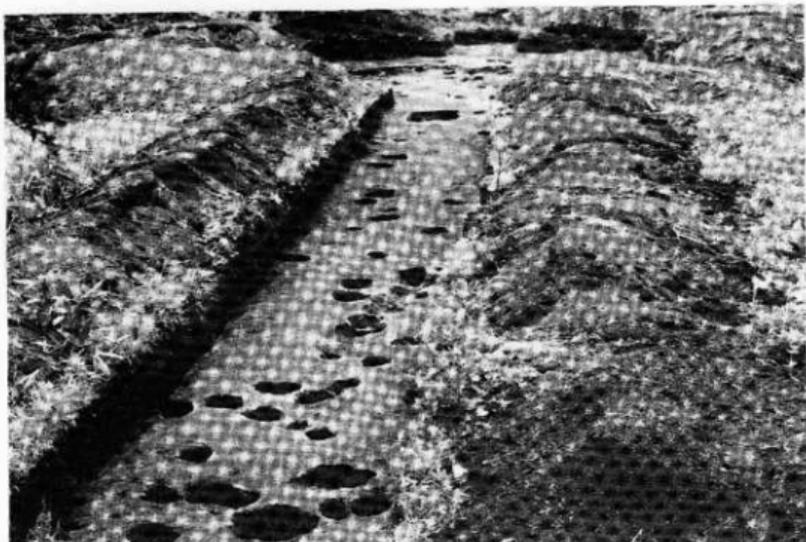


第7号竖穴遺構及び遺物出土状況



12ライトレンチ

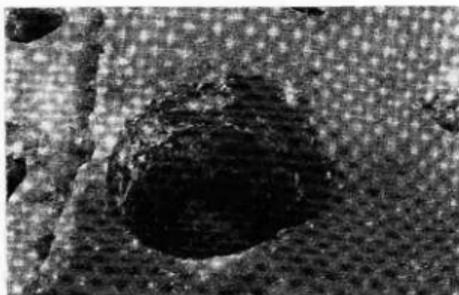
PL 4 A区第7号竖穴遺構及び遺物出土状況、12ライトレンチ



▲ I ライントレンチ



◀ 第1号土坑

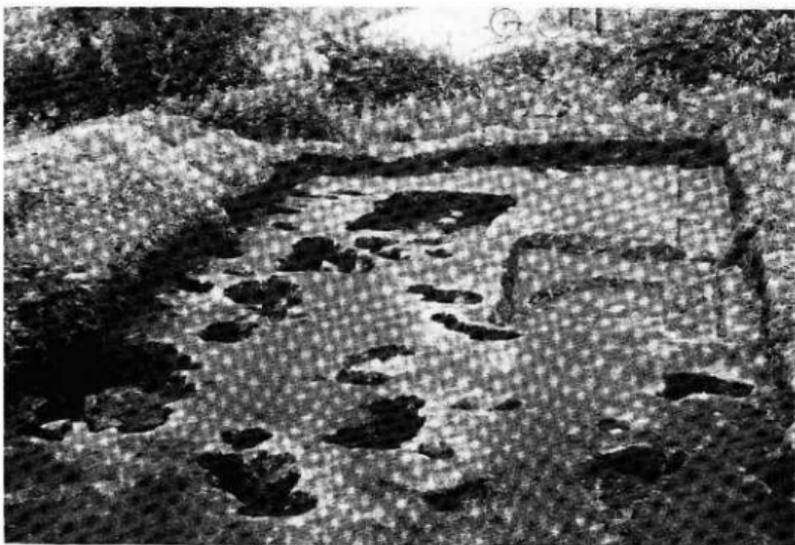


◀ 第5号土坑

PL 5 A区第1、5号土坑、I ライントレンチ



第8～10号竪穴遺構、1、2号土壇



第1、2号土壇及び周辺の柱穴状ピット

PL 6 A区第8～10号竪穴遺構、第1、2号土壇及び周辺の柱穴状ピット



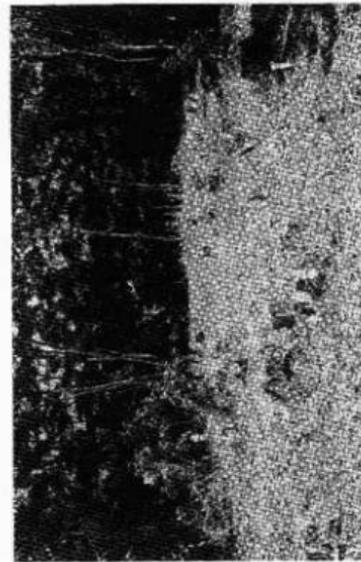
Ｂ区全景（上面から下面に至る斜面）



Ｂ、Ｃ区間の空地



Ｂ区全景（上面）



Ｂ区全景（下面）

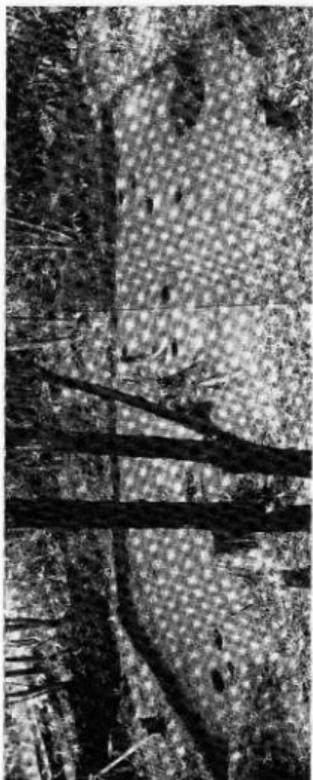
PL 7 B区全景



第1号土坑



第1号溝



3ライトレンチ



作業風景

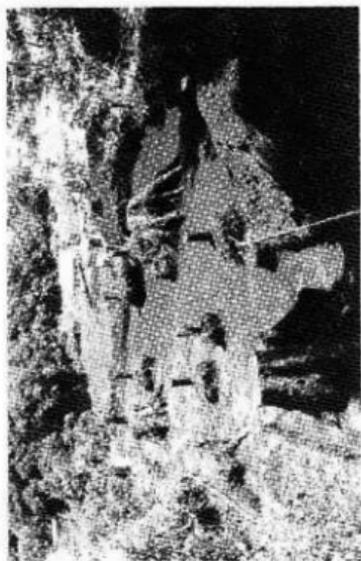
PL 8 B区第1号土坑、第1号溝、3ライトレンチ



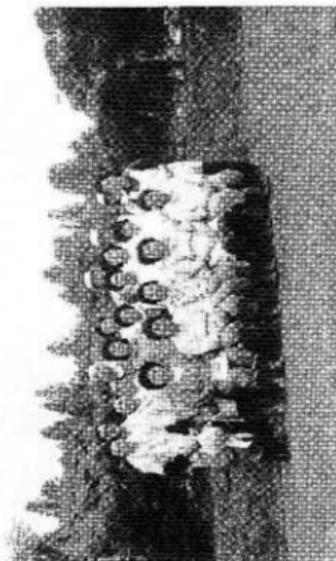
C 区 全 景



作 業 風 景



C 区 全 景



調 査 參 加 者

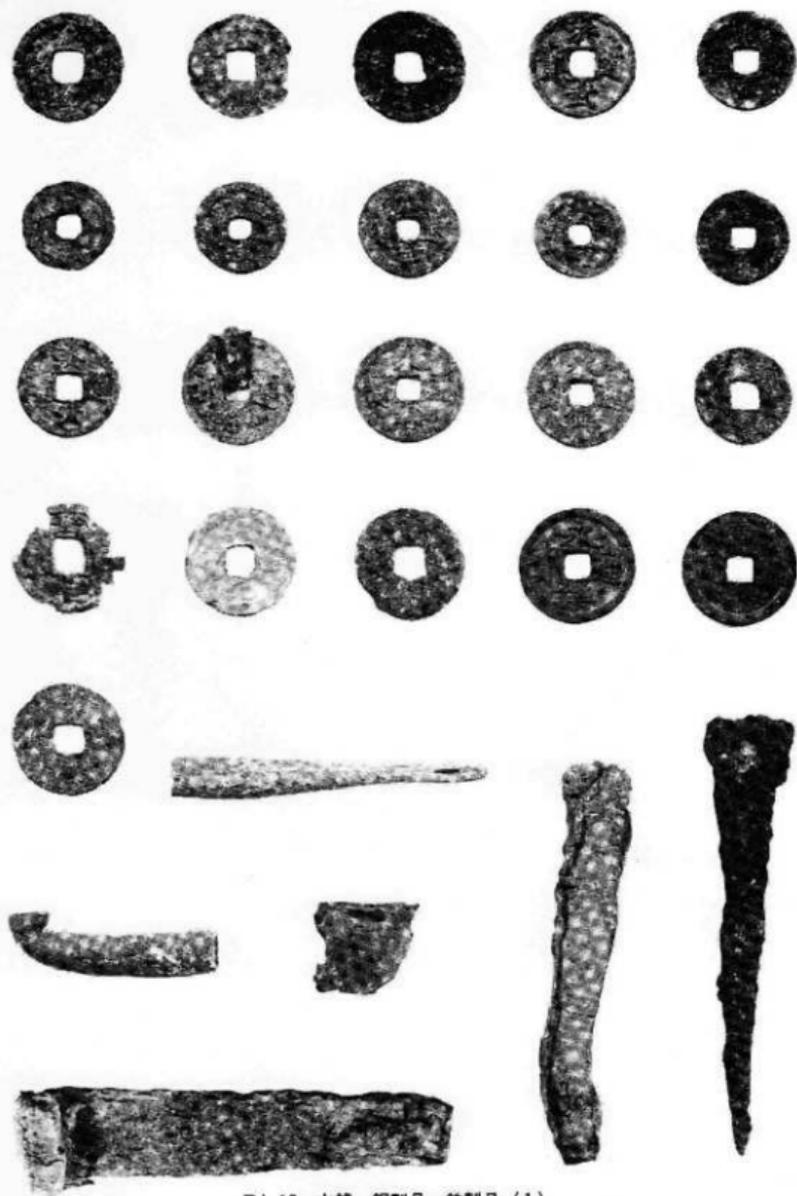
PL 9 C 区 全 景



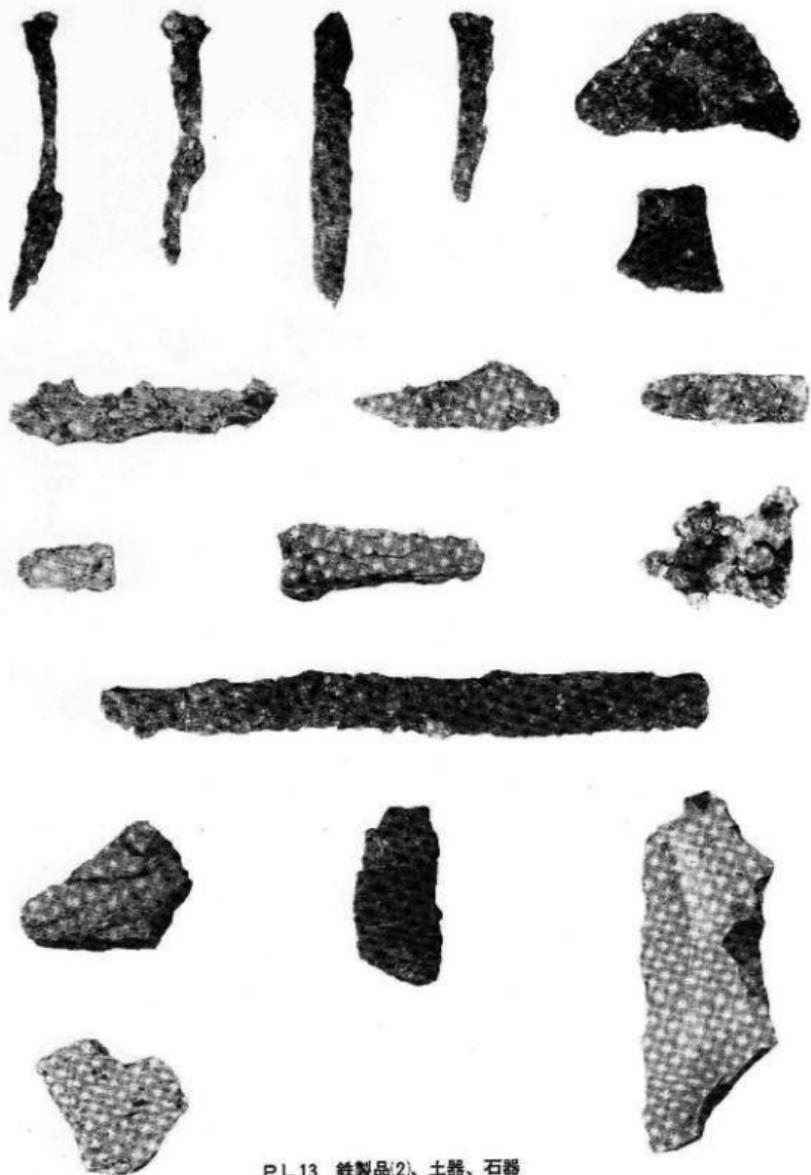
PL 10 陶磁器 (1)



PL11 陶器 (2)



PL 12 古銭、銅製品、鉄製品 (1)



PL13 鉄製品(2)、土器、石器

花輪館跡試掘調査報告書(2)

発行年月日	昭和63年3月31日
発行者	鹿角市教育委員会
〒 018-52	秋田県鹿角市花輪字荒田4の1
	TEL 0186-23-5111
印刷所	(有) 大館孔版社
〒 017	秋田県大館市谷地町後60
